

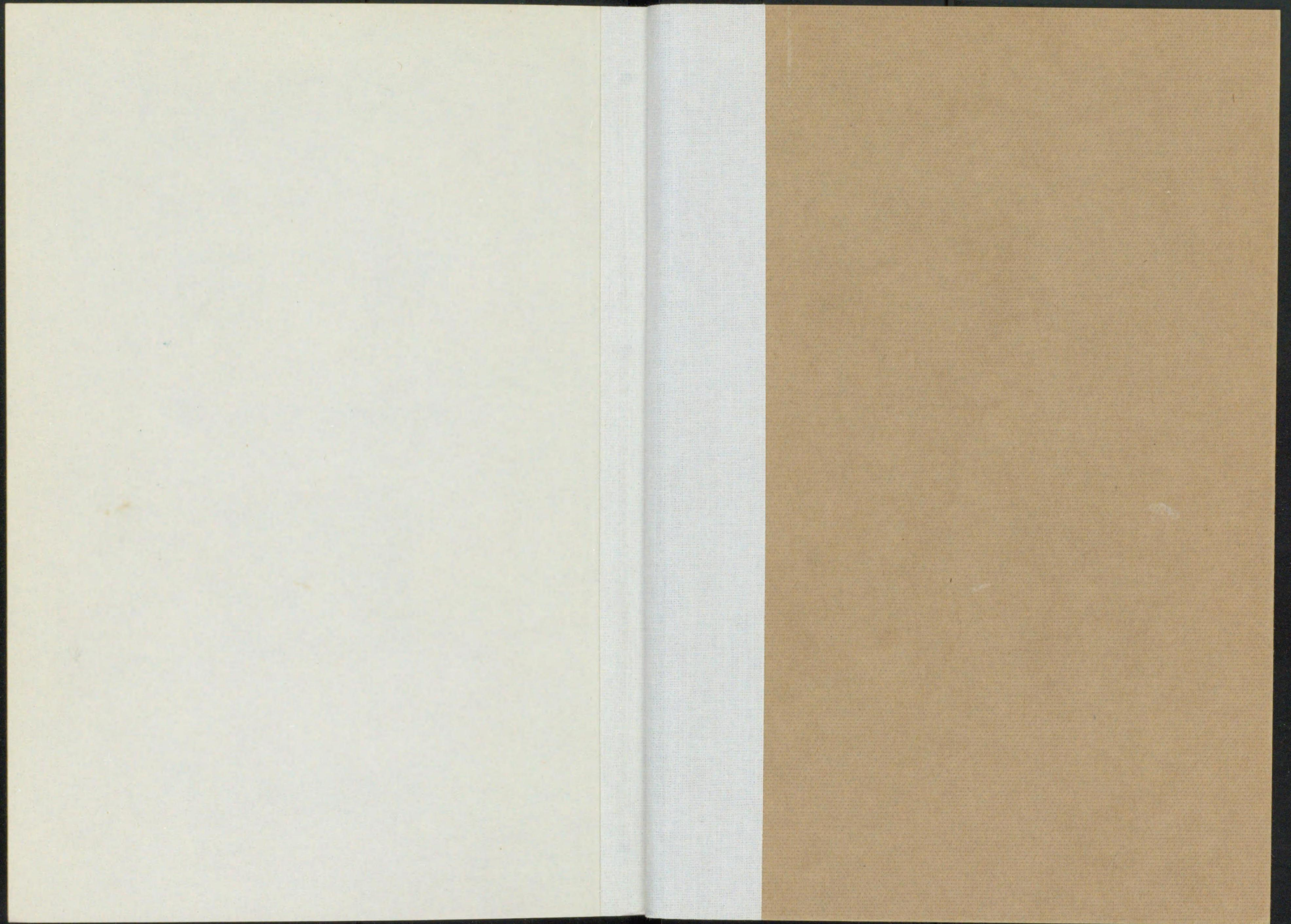
703

703-73-(8)



1200501582895

口
複
写



エドE82

新風土記叢書

8

703
73

田 秋

伊藤永之介著



小山書店版

27

煉田

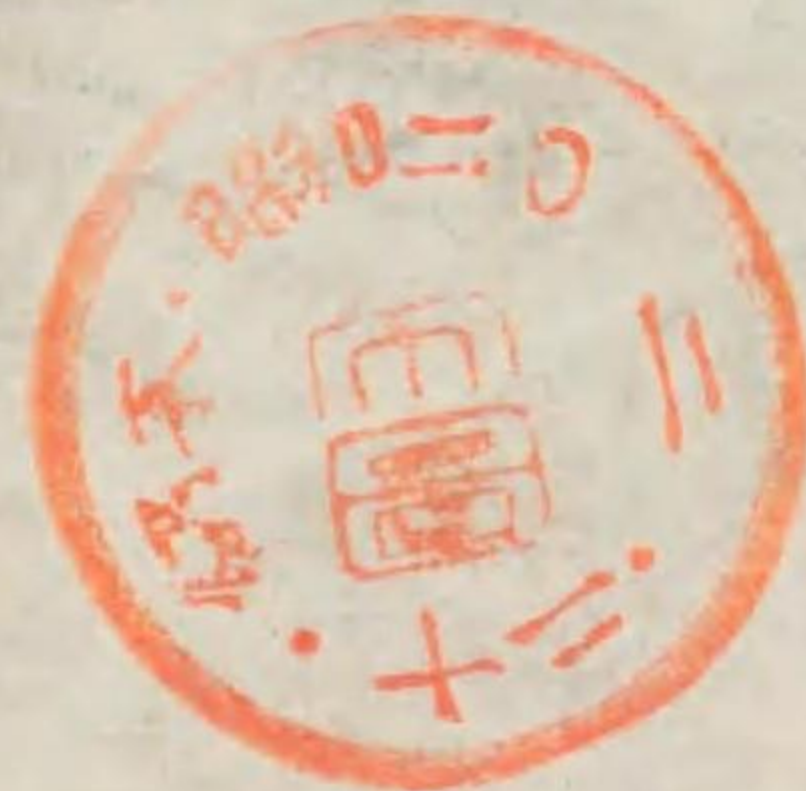




伊藤永之介著



小山書店



右
停車場にて
降り
く
れる



703
73

目次

目次

春野……………三

鋤……………七

肥曳き……………一五

鯨かど……………二五

春近し……………三五

ヒロコ……………四七

草取り……………五一

早魃……………五五



新編の公書



小山若湖



稗ぬき……………七〇

束立……………七二

三町五反……………七九

シヨツチル……………八五

糧食と備荒貯藏……………九二

馬……………一〇三

ぬかるみ時……………一二一

富山の薬賣り……………一二六

吹雪を聴きつつ……………一三三

ウメヨ……………一三八

雪降し……………一三七

落磐……………一四三

紅蓮……………一四七

柿……………一五二

種苗交換會……………一五五

エヅメ……………一五九

齋藤宇一郎……………一六三

鶏卵……………一八九

牛蒡葉餅……………一九二

神道の家……………一九六

田舎言葉……………一九九

秋田氣質……………二〇二

目次

龜田の久藏

.....三五

父祖の地

.....二四

あとがき

.....二六

秋
田

春野

苗代つくりから二番起しまでの野良仕事を、秋田では春野と言つてゐる。田刻みのころの野良は、全くこの言葉がふさはしい美しさである。

すつかり色づいた廣野の上に、まだ眞白な出羽富士が、ほんのり櫻色に輝いてゐる。

あちこちの村は、一度に咲き出した櫻や梨や杏の花にいろどられてゐる。黒々と掘られた土は、うららかな陽をいつばいに吸ひ、まだ起されない田の面には、いちめんにもない白い小花が咲きほほけてゐる。

村の家々はすつかり雪圍ひが取り去られ、苗代搔きの前にすつかり始末した薪が綺麗に

積まれてゐる。道路ばたの苗代は、陽氣にぶく／＼と泡立つて、黄色く苗が色づいて來てゐる。

ぼんやりとまどろむやうに霞んでゐる廣野には、いたるところ馬耕の人と馬が動いてゐる。たくましい栗色の馬は、毛並をつやく／＼と輝やかして、躍るやうに犁を引き、小さい改良和牛は、のろ／＼と一畝掘つてはのん氣に畦草を食つてゐる。

まことに春野といふ言葉よりほかに、名づけやうのない美しさであるが、百姓にしてみれば、春の野良の守護神のやうに櫻色に輝いてゐる出羽富士さへも、振り返つてゐる餘裕がないほどのいそがしさである。

苗代四十日と言はれるが、そのわづか四十日で、田も畑もすつかり始末しなければならぬ。田の雪がすつかり消えるのは三月の末で、夏までの間が實に短い。汗ばむやうな暖かさが二三日つづいたと思ふと、梅も櫻も梨も杏も、みんな一ぺんに咲き出し、咲いたと思ふ間に散つて、もう初夏の若葉になつてしまふ。雪國の春はまことあはただしい。

田の雪が消えて苗代搔きが始まるまでの一寸の間には、山の木を伐つて來て、一年中の柴をすつかり始末しなければならぬ。冷い水に入つて苗代にかかると、もう種蒔き、畑づくり、馬耕と息もつけないいそがしさになる。今年は殊に雪消えが十日以上も遅れたので、苗起きを早めるために、どこでも苗代の簀圍ひをやつた。冷い風の吹いて來る北西側を簀でかこふのである。圍ひをされない一ヶ所の苗代も見出せないほど、今年はそれが勵行された。勞力のあり餘つてゐた戦前でさへ、あまり行はれなかつたそれが、働手のごとく戦地にやつてゐるこのときに勵行されて、苗代といふ苗代が残らず簀の子や板でかこはれてゐる光景は、血のにじむやうな努力を想はせるものであつた。

短い春の間に、田も畑もすつかり調へる春野のいそがしさ。磐起しからくれ返し、碎土、二番起しまでの連日の勞役には、馬さへ瘦せてしまふのである。上方かみがたの二毛作地のやうに、冬でもぼか／＼と溫みのある陽が照つて、一年中土いぢりをしてゐられる地方とは、同日の談ではない。四月までは雪にうづまつてゐて、鍬を入れることが出來ないのである。息

もつけない忙しさが、どつと四月にやつて来る。

それだから、肥料に紫雲英をつくりたくても、堆肥は雪消えの後に田に曳いた方がいいと言つても、容易なことでは出来ない。今年も農會で蒔かせた何百町歩の紫雲英が、みんな腐つてしまつた。雪消えが例年になく遅かつたせいもあらうが、その管理に何よりも必要を雪消しと排水の手間が無いからである。宅地の利用、苗代の簀がこひ、土地改良、責任生産割當、平地林の伐採畑化と、今年の春野は尙更寸暇もなかつた。

花時のうらかな天氣がつづいて、雪消の遅れを取り返さうと懸命な人と馬とで、春野は毎日賑はつてゐる。今朝も櫻色に光つて眼近に野良に臨んでゐる出羽富士を、鍬を銃に代へて戦つてゐる勇士たちは、遙かに胸に描いてゐることだらう。

鍬

また吹雪になつて来た。仕事に倦んだ私は、ふと机を離れて窓に寄つて行つた。窓の外はずつと一望の田圃であるが、その積雪が殆ど眼の高さになつてゐる。背中を丸めながらその深い雪をのそくと踏み分けて、本郷の親爺が、すぐ窓の外を裏の田圃の方に行くのが見えた。

本郷の親爺は、私たちの家のすぐ裏手の田圃に小屋がけして、そこを作業場にして米を調製してゐる。親爺の家は、私の家からすぐ南の田圃越しに見える本郷の部落にあるが、屋敷が狭くて小屋がけする場所がないのと、そこまで稻を運ぶのが厄介なためであらう、

毎年私たちの家の裏の田圃に小屋がけして、そこで米をこなしてゐるのである。去年の秋に東京から移つて来た私は、次第に土地に馴染み、この本郷の親爺とも親しくなつて、冬籠りのためのシベ布圍のシベを貰つたり、鶏小屋に敷藁を入れてもらつたりするやうになつた。

ついこの間も、戸外の小屋が餘り寒いので、鶏を家の玄關に移すことになつたが、親爺に頼んで新しい藁を入れてもらった。

その前の日に、三羽の白色レグホンのうちの一羽が死んだ。小屋の屋根の片側をつぶして雪が崩れ落ち、それに押しつぶされたやうな恰好に斃れてゐた。雪が深くなる前に、イタチに襲はれたところを家の者が目撃してゐたし、或はイタチにやられたのか。それとも、このごろ野菜の配給が月に二度ぐらゐりしかなくて、臺所の屑物も出ず、三度の餌が二度になり、一度しかやれない日もあつたから、營養不良のためなのか、原因はいろ／＼考へられしたが、結局いづれとも判明しなかつた。しかし要するに、吹きさらしも同様の小屋の寒さがたたつてゐることは明らかであつたので、二羽の鶏は玄關の三和土に入れることにしたのである。

「こりやあ、もう少し藁を入れないといけないなあ」

戸外の暗い小屋の中で、それまで寒さに縮んでゐた鶏は、さば／＼とした明るいコンクリートの三和土の上に敷いた新しい藁の上を、嬉しさうに飛び廻つてゐた。しかし、藁の下から冷たいコンクリートがあちこち顔を出してゐて、どう見ても藁の量が少し足りなかつた。

「今、また来るさうですよ」

義妹はさう言つたが、短い冬の日には直きに暮れてしまつて、親爺はつい姿を見せなかつた。来たら面倒賃をやらうと思つて、待ちかまへてゐたが、次の日も来なかつた。

私は氣になつて困つたが、多分親爺は忙しくて手が廻らないのだらうと思つて、我慢した。

このときだけではなかつた。何を頼んでも、親爺は私の期待通りにはやつて呉れなかつた。鶏小屋に藁をちよい／＼入れ換へてくれるやうに頼んで置いても、冬の間にたつた一度持つて来て呉れただけであつた。

しかし、その腰が曲りかけてゐる年とつた姿を思ひ浮かべると、私は自分の腹の蟲をおさへないわけにはいかなかつた。土臺こつちが無理なのだと思はざるを得なかつた。

私たちの家の裏には、親爺のつくつてゐる田が七反歩ほどあつた。恐らくそれが全部なのだらうが、歳六十を過ぎた親爺が、殆ど獨りでつくつてゐるのである。

息子は四年前から戦地に行つてゐる。家で手助けになるのは、耳のわるい娘だけである。三十近い歳でまだ嫁に行かないこの娘は、ときに親爺といつしよに田圃に来てゐることがあるが、そのろ／＼とした動作から考へてみても、餘り役に立つてゐるとは思へなかつた。親爺もその働きをたのしみにしてゐるらしくはなかつた。

しかも、親爺のやり方はひどく舊式であつた。馬がなかつたら、よそから借りても、その方が得になりさうに思へるが、私は親爺が馬をつかつてゐるのを、つい見かけたことがない。一日何圓もの金を馬に拂ふよりは、自分の骨をつかつた方がいいと考へてゐるのかも知れない。田打にも馬をつかはず、三本鍬で辛抱よくやつてゐる。収納にあたつては田圃中に稻鴉をつくり、刈つたあとの田圃に小屋がけして、毎日家からのそ／＼と通つて来て、せつせと調製してゐる。作業場と納屋とをかねてゐる小屋だから、小屋と言つても相當に大きいものである。合掌づくりではない。屋根と軒と別々の小屋である。丸太を組むだけでも何日もかかる。屋根と周りをすつかり藁と萱で葺いて、根もとの隙間を粘土でふさぎ、雨水が流れこまないやうに周圍に浅い排水溝を掘る。それまでにするのに、親爺はものの一月近くも毎日家から通ひつづける。そこは田圃だから、春になれば、小屋はすつかり解してしまふ。また秋になると小屋がけする。毎年それをくり返してゐるわけだ。やうやく出来上つた小屋の中から、ぎいん／＼と固い物を引つ搔くやうな足踏稻扱機の音が響いて來るころには、田圃にはもう雪が積り始めてゐる。

私は二三度その小屋をのぞきに行つたが、穴ぐらみたいな薄暗いなかで、ただ獨り、わき眼もふらず機械を踏んでゐるその拳骨みたいなぼそつとした顔を見ると、長話するのも氣の毒になつて、匆々にして引き返して來た。

しかし、右手に高く積んだ稻束を素早い手つきで次から次と扱いて行く調子や、一定のたるみのない足の踏みぶりなど、親爺の仕事ぶりは、往き還り田圃路で見かけるのそくとした猫背の年寄じみた恰好とは、凡そ似てもつかない、しつかりとしたびいんと張りきつたものであつた。ことに、一把扱き終ると同時に、さつと藁束を後ろに投げ棄てて、間髪を入れずに次の一把を機械にかける手練の手さばきなどは、とても六十を過ぎた年寄とは思へなかつた。

義妹たちがずつと以前からここにゐる關係で、一家で東京から移つて來る以前にも、私はしばしばここにやつて來てゐたが、いつか親爺が田を打つてゐるのを見たことがあつた。名もない白や黄の花が咲き亂れてゐる畦草には蝶が舞ひ、さんくと降りそそぐ初夏の陽は、汗ばむほどあたたかかつたが、親爺の振り上げる三本鍬の先だけは、ざらりと氷のやうに冷く光つた。

身の丈はせいと五尺あるかなしだが、がつしりとした體を少し屈め、蟹股に踏んばつて、ゆつくりと鍬を振り上げてゐる。その腰つきが、實にしつかりしてゐた。

近くの田に、中年の夫婦の姿が見えたが、その亭主が鍬を振り上げてゐる腰つきは、親爺の木の根つ子のやうに据つたそれから見ると、ふらと腰ともいふべき頼りなさであつた。

しかし、それにしても、春になればすつかりほぐしてしまはなければならぬ小屋を、半月以上かかつてのろくとつくつてゐる姿や、腰まで雪にうづまつてその小屋に毎日通つて行く熊のやうに着ぶくれた恰好を見る度に、もう少し樂に仕事が出来ないものだらうかと、私は思ふのであつた。餘計に骨を折り過ぎてゐるやうな氣がして仕様がなかつた。

しかし、無論それには暮し向きが關係してゐるにちがひなかつた。馬がありさへすれば

三本鍬を振り上げて、一つ／＼土を掘り起さなくても済むし、稻塙を積み小屋を建てるだけの屋敷の廣さがあれば、毎年面倒な小屋がけを田圃中にしなくても済むわけである。

日に五十刈起すとして、七反歩では、磐起しだけに半月近くもかかる。それをくれ返し碎き、水を入れて、代掻きするまでの手間は大變なものである。

こんな手間のかかるの／＼とした調子で、いつたいどうなることだらうと、私は餘計な疝氣をやまずにはゐられなかつたが、親爺おとは来る日も来る日も相變らずのそ／＼と働き、つづけてゐた。

しかも、それで結局今年もちやんと、入並の作を穫つてゐた。農會の指令通りに苗代跡に植ゑることも怠らなかつたし、供出米も割當られただけ運び出した。六十といふより七十の方に近い年である。都會の老人ならとつくに隠居して碁でも打つて日を送つてゐる年だがと、私は一種の驚歎をもつて、そのもつそりとした後姿を見送らずにはゐられなかつた。

肥曳き

さしもの吹雪つづきの荒れもやうやくをさまつて、春めいた陽がのぞきはじめる二月の末から三月の初めころになると、そろ／＼肥曳きが初まる。夏からずつと丹精して屋敷うち積んで置いた堆肥を切り崩して、まだ雪が三尺もある田圃に、櫛で曳くのである。

黒砂糖みたいにぼろ／＼によく腐熟した堆肥を、いつぱい盛り上げた櫛を、倒れんばかりに體を前にのめらせて、陽光のまばゆい雪の上を、せつせと曳いて行く藁はばきをつけ、馬の面つらをかぶつた女たちの姿が、藍を流したやうに天が青く、照り返しのまばゆい雪の野良に、點々といたるところに眼につく。



馬の面とは讀んで字の如く、馬の顔のやうに長いところから來たものである。雨の日雪の日のかぶり物であるこの馬の面は、殊に肥曳きには付きものである。とりわけ女はみんなこれをしてゐる。陽除け雪除けは勿論、照り返しも除けられる。

肥 眞冬の野良は雪が柔らかくてぶぶくうづまるので糞が曳けないが、このころは雪が硬くなつてゐるので、樂に曳かれる。これを堅雪を渡ると言ふ。前日の陽光で融けた雪の表面は、未明の寒さで堅く凍つてゐて、歩いてもぬからない。それで肥曳きは昔から、このころ始めることになつてゐる。

自分の田圃まで來ると、その雪をシャベルで丸

く掘つて、糞をひつくり返して、黒砂糖みたいなぼろ／＼の堆肥を穴のなかにあける。この黒砂糖みたいな肥はよく腐熟したものであるが、なかには藁と粃殻とのなまなましいのも、今年あたりはあちこちに見えた。堆肥を積む手間が充分でないのである。それに、平野の大百姓は藁や粃殻が多いが、草刈場に恵まれないので、いい堆肥をつくるのに難儀する。

同じ秋田縣でも、肥の積み方は土地によつてそれ／＼ちがつてゐて、間隔を離して大きく疊ぐらゐるに四角に積むところもあれば、一枚毎に小さく丸く積むところもある。このころでは肥料分が亡失するといふ當局の指導で、たいてい一つ／＼苦をかぶせて置くやうになつた。

今年も近くの山の雪がまだらになるころには、見渡すかぎりの野良は、すつかり肥曳きが出来て、耕模様を織り出してゐた。それに、あつちにもこつちにも、客土の黒土が累々と積まれ、暗渠工事で魚の腹を裂いたやうに田面が掘り返されてゐる。働き盛りの多くの

男たちが、みんな戦線や工場に行つてゐるといふのに、どこにそんな労力がひそんでゐたのだらう。私は野良を眺める度に、驚ろきを新にせにずはゐられなかつた。田圃のいたるところに百姓の姿が見られるのは、肥曳や田植や稻刈のときぐらゐのものである。たいていは、殆ど人影を見ないやうなのどかな野良の眺めであるが、十日もして見ると、いつの間にかすつかり姿を變へてしまつてゐるのである。

金肥の不足の戦時下、この堆肥の重要性はとみに加はつた。最低反當り三百貫は入れなければならぬが、勞力不足の折柄それには一方ならぬ努力がある。殊に草刈場の遠い平野の田所では容易でない。以前は一里もあるところから日に二駄も三駄も刈つて來たのが、今は畑や田廻りの戻りに、その邊の草を取つて來るぐらゐのことしか出來ないといふ状態である。それにもかかはらず、堆肥を反當り四百貫も五百貫も造成してゐる村もある。四百貫入れるとか五百貫必要だとか言つても、机の上からの掛聲では、堆肥は出來ない。眞に血の出るやうな努力があるのである。

秋田縣には昔から馬が多い。それは馬産地の南部と隣合せてゐるばかりではない。馬がなければ、一人前の百姓ではないと考へられてゐる。それもそのはずである。米づくりにハ厩肥が何よりも必要だからである。馬に踏ませたいい堆肥をつくるのが必須だからである。堆肥は肥料としてだけでなく、地温を高めるものとして大切である。

私は去年の晩春、青森縣の七戸に、牧場視察に行つたが、いかにも南部の馬産地らしく馬の繪が客室にも風呂場にも洗面所にもかけてある宿屋では、五月の末といふのに、まだ炬燵がしてあつた。それは、その宿屋だけにかぎらなかつた。どこでも炬燵をまだ藏はないので、火の用心の夜警が出てゐると言つた。

七戸は山間部ではない。海岸にも左程遠くはない平坦部である。それなのに、よそではもう田植が初つてゐるといふのに、苗はまだ生毛のやうにほやく／＼してゐるし、麥は腐つたやうに土にへばりついてゐるし、菜種がやうやく咲き始めたばかりであつた。

着いた日もその次の日も、空はどんよりと曇つて、霧みたいなこまかい冷たい雨が降ると

もなく立ちこめてゐる。この北洋のガスをともなつた東風は、もう二十日もつづいてゐるといふことであつた。

なるほどこれでは、近年になつても再三の冷害を受けなければならなかつたわけだと私は思つた。それと同時に、馬産にともなふ厩肥が、どんなにこの地方に必要なものであるかといふことに、初めて合點が行つたやうな氣がした。

七戸は馬と人とが同居してゐる町と言つてよかつた。裏通りに入ると、どこの家にも二頭や三頭の馬がゐた。或る家には五頭も六頭もゐた。私の覗いた家では、家屋を真中から二つに仕切つて、半分が家人の住居、他の半分が厩になつてゐた。その仕切板の圍爐裏に近いところが切り抜いてあつて、そこに坐つてゐる家人が一寸背のびすれば、厩の中が覗けるやうに出来てゐる。いや、さうしなくても、馬の動靜は仕切板を通して手にとるやうにわかるのである。二六時中馬の様子を見とどけてゐるわけである。

私たちはやがて裏口から厩の方に廻つた。どこか野生的な身振りの好人物らしいお神さんが、早速間栓棒の下をくぐつて中に入つて、生れて間のない子馬を愛撫しながら、まるで我が子を人に示すやうに、相好を崩して私たちに見せるのであつた。後で人の語るところによると、このお神さんは、アイヌの血を分けてゐる女だとのことであつた。

家族も同様にして扱ふといふ百姓一般の馬に對する愛情が、ここではもつと濃やかなものであることを私は感じないわけにいかかつた。

子分けと言つて、この邊では、百姓が親方の馬を自家の厩につないで置いて、その飼育料として、取つた子馬の二本足を貰ふ。二歳の秋に糶に出した子の賣値の半分を貰ふのである。毎年間違ひなく子が取れるものではない。平均すれば二年に一頭、三年に一頭といふことにもならう。しかも母馬を買ふときには足一本がこつち持ちである。二年乃至三年の間の面倒と飼料を勘定すると、足二本もらつたところで手間賃にはならない。

それでも厩を空けて置く氣にならないのは、永年の習慣である。いや馬が可愛いからである。

と、土地の入は聞かして呉れたが、私はそれだけではないと思つた。馬をぬきにして百姓が出来ないからではないかと思つた。

じめ／＼した東風が吹きつにつて春も冷涼な田圃には、厩肥を缺くことが出来ないのである。冷い田の地温と水温を上げ保たせるには、堆肥を澤山入れるのが最上の方法である。いや、それ以外に方法がないと言つていい。

それだから、水の冷い秋田の山間部でも、馬のない家では、馬耕の終つたあとに平野の農家から馬を曳いて来て草を踏ませもする。日本の農業に獨得なこの厩肥は、特に冷害に見舞はれ勝ちな東北地方には、缺くべからざるものであるのだ。しかもそれは馬の方がいい。牛は馬ほどの厩肥は出ないからである。

温暖な日本の西南部には牛が多く、冷涼な東北地方の、しかも青森、岩手、秋田の、天明天保の飢饉以來兎角冷害の被害を受けて来た地方に馬が多いといふことは、おのづから理法にかなつてゐるのである。馬政の方針がどんな風になつてゐるかは知らないが、かういふ點も充分に考慮されなければならぬのではないかと思ふ。

堆肥の重要性がいよ／＼加はるにつれて、その積み方や管理の方法が、いろ／＼やかましく言はれてゐる。齋藤宇一郎が明治三十四五年のころから聲を大にして唱へた堆肥舎の建設は、その出身地の由利郡方面では随分普及してゐる。コンクリート底にすることは、資材難で出来ないにしても、それに代る適切な方法もいろ／＼あるだらう。

それとともに、この雪の上に堆肥を曳くことが、このごろ問題になつて来た。雪の上に積んで置いては、雪消水と共に肥料分が亡流してしまふから、この習慣をやめて、消雪後に田圃に運べといふのである。それは學界からも言ひ出され、農業會の方からも言はれてゐる。

その理窟から考へると、從來百姓のやつて来たことが如何にも馬鹿げて見えるが、しかし、それにはそれだけの理由があつたのである。

春先の堅雪を利用して運ぶことが、作業に都合がいいことは既に言つた。それだけでは

なく、仕事の手順としても、肥曳きのすぐあとには薪や柴を伐る仕事と、それを整理する仕事とが控へてゐる。秋の稻揚げの前後に伐つて山に積んで置いたのを、春先に雪の中から掘り出して糶で曳いて来て、野良がいそがしくなる前の一寸の暇に整理する。そのあとはすぐに、苗代搔き、畑づくり、種蒔き、田刻みと、もう眼の廻るやうないそがしさになる。その間に肥曳きの作業を割りこませることは容易ではない。つまり堅雪時分の肥曳きは、氣象に應じ仕事の手順を考へてのことで、永年の間に自然にその時期に定つて来たものである。同時にそれは、眼まぐるしい春野になつてからでは、手に餘つてどうしやうもない分の仕事を、まだ耕作にかかれぬ雪消前にくり上げて、いち早く支度にかかるといふ、百姓の着實な氣構へを示す習慣でもあるのである。

さればと言つて、これは絶対に動かすことの出来ないといふものではない。雪の上に堆肥を積むことによつて、本當に肥料分が流失するものであるなら、これはどうかして改めなければならぬだらう。

鯨

近くの山の雪がすっかり消え、苗代搔きや畑の種蒔きが始まるころになつて、カドの配給があつた。カドとは鯨のことである。小さい手籠に一つ位づつ一日二日置きに、その配給は半月もつづいた。

それまでは、魚の配給といふものは、まるで無かつた。十二月の雪の降り初めから、三月末の雪消えまでの冬の間に、二度か三度あつただけである。海邊に遠いこの地方は、戦争前から、冬季はことに魚は少なかつた。それにしても、あんまり配給が無いので誰しも困つてゐた。

それが急に連日の配給なので、みんな大喜びで舌鼓を打つた。急に生き返つたやうな氣持であつた。

秋田の生活には、このカドとハタハタが付き物になつてゐる。カドを食はないと、春が来たやうな氣がしないし、鱒（ハタハタ）のブリコを食はないと、正月といふ氣がしない。若しカドが口に入らなかつたら、その春はどんなにさびしい思ひをするか知れない。それを思ふと、今年もまたカドに恵まれたことは何といふ幸であらう。この決戦下に、カドを澤山に食つて春の季節感を味へることは望外の幸福と言はなければならぬ。

「勿體ないから漬けて置けよ」

と、私は妻に言つたが、初めの十日ほどはなか／＼實行されなかつた。久しぶりの魚の味なので辛抱出来ないのである。昨日はシヨツツル貝焼（鹽汁貝焼）で、今日は焼いて、といふ調子で、配給の度にみんな食つてしまふ。それが十日もつづいて、流石に少し飽き氣味になつて来たといふころになつて、やうやく少し甕に鹽漬にした。

「一度に來れば漬けられるんだけれど——」

初め妻はそんなことを言つてゐたが、實際五匹や十匹の配給では、鹽漬けにして、夏から秋の用意にするといふほどではない。以前は都合のつく家では、五貫目も十貫目も漬けたものである。町でも農家でも、みんな保存食糧として漬けた。麴を入れて漬けると、うまいにはうまいが、永保ちがしないので、米糠と鹽で漬ける。大きな重し石をするので、秋にはこつ／＼と板のやうに硬くなる。

農家では魚など滅多に食はない。祭禮とか祝事とかあるときでなければ、生魚など食膳にのぼせることはない。それで魚氣といへば、この鹽藏のカドを一匹取り出して、頭數だけに切つて皿につけるぐらゐのもので、あとはお汁か大根漬ぐらゐで済ませる。それも始終は甕の蓋を開けない。大事にして時たま少しづつ食ふから、春から夏、夏から秋、冬までももつ。家によつては冬を越して雪が消えるころまでもたせる。ハタハタも同じやうにして貯藏する。だからこれは、ハタハタと共に、農家に於ける唯一の動物蛋白の補給源に

なつてゐるのである。

漬けて置くほど配給がなかつたなどと、他地方の人々は贅澤のやうにきこえるだらうが私の言ふのはこの意味からである。これまでまるで無いと言つてもよかつた配給が、しきりにあるのも、またこの意味もあるだらう。全国的にこんなに配給があるわけではない。きつと、昔からカドと縁の深い秋田や青森には、他地方よりも割當が多いのだらう。四月の末ごろまでに七百萬貫とかの配給のうち、秋田縣に對して三十七萬貫とか割當てがあるといふ新聞の記事でも、その事情はうかがへる氣がする。

だから、これは毎日食へといふ意味ではない。餘して漬けて置けといふ意味をふくめての、連日の配給なのだらう。一度に澤山まとめて配給すれば漬けるのに都合がいいが、さう出来ない事情があつて、分けて配給するのだが、後の用意に鹽藏してもらひたい、さういふ意味の連日配給なのだらうと、私は解釋して、後から來た分は妻に言ひつけて漬合せた。

北海道や樺太の鯨が、どうしてそんなに秋田と深い關係があるのか、不思議に思ふ人があるにちがひないが、それにはそれだけの理由がある。

明治の中頃までは、秋田でも相當にカドは獲れたものであつた。ことに男鹿半島では多くとれた。しかし、舊幕時代の本場は松前の福山、江差であつた。

江差照る照る

函館曇る

合の福山花が咲く

といふ追分節の一節は、何よりも鯨漁場としての福山、江差の往時の繁昌と賑はひを、言外に追想させるものである。以前には函館でも相當の漁獲があつたのが、福山、江差と次第に北上し、本場は岩内、余市に移り、昭和に入つては、さらに奥場所の留萌、増毛で

しか獲れなくなつてしまつた。その留萌、増毛でさへも、數年前ごろにはばつたり群來を見なくなつて、本場は樺太に移り、さしも鯨で榮えた北海道もつひに鯨に見放されたかとおやぶまれたが、また去年から余市あたりでも相當の漁獲を見るやうになり、しかも今年は留萌、増毛は大漁であるといふ。

北海道では、鯨を春告魚と稱してゐる。花も近くなつて、どんよりと海上の曇つた日に、鯨は群來する。これを群來と言つてゐる。それ群來たとなると、漁場は上を下へのごつた返しになる。群來の期間は一週間か十日、時には半月に及ぶ。三日で雑用を上げてしまふか、それとも結局雑用倒れになつてしまふか、その一週間か十日の勝負である。何十萬石も大漁となると、その間の漁場は晝も夜も戦場のやうな騒ぎである。建網は晝夜をわかたず上げられて、ひつくり返るほど鯨を積んだ舟は、絶間なしに織るやうにやつて來る。岸の納壺はあふれて、濱は歩く場所もない。糟玉を煮る者、魚の腹を裂く女たち、身缺鯨の乾場は見渡すかぎり葡萄棚のやうに連なる。舟の漁師や陸廻りの雇たちは、その漁期の間は殆ど一睡する暇もない。わづかに働きながら居眠る有様である。舟にかけた歩み板から、鯨の納壺のなかにたたき落ちて、やうやく眼がさめる雇もあると言つた具合である。

この鯨漁場の漁師たちは、地もとの者もないではないが、大部分は、出稼ぎである。これを北海道ではヤン衆と言ひ、秋田では雇と言つてゐる。南部の八戸、秋田の男鹿半島からの出稼ぎが、昔から最も多い。大部分は秋田と青森の人間である。大體は海岸線の村々の漁に經驗のある者であるが、そればかりとはかぎらない。海岸から遠い地方の農村からも相當に行つてゐる。

「手前、本場のカド食つて來たか」

男鹿では、自分の優越を示すとき、或は一人前の仕事の出來ない者に對して、かういふ言ひ方をする。松前の鯨を食つて來ない者は、一人前ではないとされてゐた。それで、どこの家の若者でも、十六、七にもなつて、そろ／＼大人の仲間入りするところに近づくと、先づ鯨漁場の雇賣りに出かける

男鹿で鯨の獲れる時代からさうであつた。それが、鯨は獲れない、トロール船で荒らされて沿岸での漁が年々に少くなる。それにしたがつて、北海道への出稼ぎはますます盛んになり、その賃卸が男鹿の村々の経済の大きな部分を占めるやうになつた。戦争になつても、この状態は餘り變らず、一人も北海道や樺太や千島に出稼ぎに行つてゐないといふやうな家は、滅多に無いと言つていい。少し前までは、家に残つてゐる者は、病身の長男かよく／＼の屑だなどとさへ言はれてゐた。親子で揃つて出かけるのもある。昔は鯨漁場から眞直歸つて來もしたらうが、近年は多くは、菜の花の咲く時分、漁場の顎別れをすると、その足で道内の貝場とか農場とか炭坑とかに出かけたり、或は樺太の山子に行くなどして、男鹿でハタハタ漁の初まる年の暮近くになつて、津軽林檎の網袋を背負つて歸つて來る。面白いのは、この男鹿の北浦などでは、ストーヴをしつけてゐる家が多いことである。

北海道文化の輸入なのである。それほど男鹿は北海道乃至北洋と強く結びついてゐる。それだから、東京の工場などに行く者は殆どない。滿洲開拓の義勇軍などにも、國民學校の先生がいくらすすめても、なか／＼父兄が動かない。北洋方面しか考へてゐないのである。このやうに、秋田の地とは切つても切れない縁のある鯨である。無論、秋田や青森が鯨の需要地であるのは、輸送の関係もあらう。生鯨の本當の味はひを知つてゐるのは、イキのいうちに食へる近距離にある陸奥や出羽の人間であると言へるだらう。北海道から遠い地方には、昔から鯨は身缺鯨として、または肥料の鯨糞として輸出された。しかしそれだけではなく、鯨漁そのものに出稼ぎが澤山に出てゐるといふことが、鯨の味を一層親しみ深くも味ひ深くもしたのである。

カドのサシビロ貝焼こそ、秋田人にとつて春の最上の食味である。青々としたサシビロの野の香と、銀色の鯨の濃い深い海の幸の味、永い／＼冬の間待ち望まれた雪國の春の喜びも、これを食はないことには、本當に豊かに満された氣がしないのである。

一人で一匹は食ひきれないほど大きなカドを、イタバカドと言ふ。これは昔、長慶金山で榮えた伊多波に、その初物が殿様より先に運ばれたのでその名があると言はれるが、そ

のイタバカドが、私らの子供の時分には、一錢か二錢のものではなかつたかと思ふ。それだから、どんな小前の農家でも、漬けて置くほど澤山に買ふことが出来た。一時にどつと腐るほど獲れて値段が安いといふことと、値の高い魚にもまさつてうまい魚であるといふことが、ハタハタと共に、カドをして秋田人のすべてに無くてはならないものにしたのである。

配給はまだくく五月の十五日ごろまでつづくと言ふ。どこの家でも鯨を相當に漬けられる見込みである。これこそ、これから馬耕から田植へと、眼がくらむほど増産に精出さなければならぬ農家への、最上の贈物なのである。

春近し

二月二十六日。

吹雪やまず。ここ十日ほど連日吹雪がつづいてゐるが、昨日は今冬以來の猛吹雪であつた。夜に入つて美しい星空となる。

二十七日。晴れたり曇つたり。久しぶりで陽がさして暖い。三羽の鶏のうちの一羽が、薄暗い小屋の中で、俯伏せに倒れて死んでゐるのを、朝の餌をやるときに発見する。屋根がこはれて雪が落ちて來てゐたので押しつぶされたのではないかと話し合つたが、要するに營養不良と寒さのためらしかつた。

二十八日。午後からまた吹雪、北風烈し。

二十九日。今日も雪。

三月一日。

久しぶりの快晴。屋根の雪が融けて雨垂れの音繁し。

二日。時々陽がさして、寒さゆるむ。

三日。うららかな日和。仙北郡角館に行つての戻り路、大曲の驛は、構内の線路の砂利が出てゐたが、横手に着いて停車場を出ると、同時にここの雪の多いのに、今更におどろく。

四日。照つたり曇つたりの天気、夜は北風烈しく、ストーヴの煙突が折れないかと心配する。

五日。昨日同様の天気。

六日。時々小雪。

七日。やや寒さぶり返す。



が乾くのを待ちかねて、陽だまりの屋根にのぼるのが、雪國の子供らの何よりの楽しみで

八日。晴れ。めつきり寒さゆるんで春めく。

九日。あたたかい雨降り、時々陽がさす。

十日。陽が照つてあたたかい日和。まぶしい雪路を子供ら喜々として駆け廻り、或は乾いた屋根に上つて遊んでゐるのを見かける。

このごろ雪降しをした屋根だけは、数日來の暖氣で乾いてゐる。道路

ある。屋根から降した雪は、まだ庇にすれ／＼の高さである。まだ學校に上らない小さい子供らも、庇の下にゴム靴をぬいで、屋根に上つて遊んでゐる。

十一日。綿雪降りしきる。こんな雪を共喰ひ雪と言ふ。滞雪なので、寧ろ消雪作用を爲すのである。

十二日。曇り。夜いたく冷える。

十三日。時々晴れ。雪が融ける。

十四日。快晴。青々と晴れた空に、薄紫の千切れ雲が浮み、近くの山の雪は汗ばむやうに輝いてゐる。野良のいたるところに肥曳きの姿を見る。雪原のどこからどこまで耕のやうに堆肥の黒點が描かれてゐる。

十五日。晴れたり曇つたりの天気だが、春めいて暖い。二番の汽車で子供を連れて秋田市に出かける。行く先々肥曳きの姿。仙北平野では馬糞で運んでゐるのをあちこちに見る。野良が廣く、大百姓が多いからである。刈和野驛を出て間もない左手の沿線の田圃には、

何町歩となく、累々と客土の土が運んであつた。おびただしいその勞力を想ふと、何とも言へないたのもしさをおぼえる。和田の先では、横手の方では一枚毎に小さく盛つてゐる肥が、三四枚に一箇所、一坪ぐらゐの大きさに積んでゐる。四ツ小屋邊になると、仙北でもまだ雪を何尺と掘つて肥を積んでゐるのに、今日明日に田の土が出るほど雪が少く、秋に運んだ肥の苦が、ひよこ／＼枯れた頭を出してゐた。ここでも暗渠工事の掘り返しや客土が、いたるところに見える。

秋田市はもう草履路になつてゐた。横手は櫛だけなのに、自動車や人力車が走つてゐる。半分はまだぬかるみだが、道路はどこにも雪が残つてゐない。聞けば、數日前にいつせいに雪消しをしたといふことであつたが、それにしてもまだ深い雪にうづまつてゐる横手とは雲泥の差である。日本海に近いので、暖流の影響を直接に受けて、雪消えが早いのである。

十六日。晴れ。二時の汽車で秋田市を發つて横手に歸る。まだ氷の厚さが二尺もある横

手の町の馬糞で眞黒い雪融路の汚なさが、今更のやうに眼につく。子守に疲れて驛前から櫓に乗つたが、雪融路のひどいでこぼこで、櫓があまりに難行するので、途中で降りて、子供だけ乗せてやる。ここしばらくは、櫓は終りだし車もまだ通れないし、乗物が一切きかないのである。

十七日。雨。

十八日。曇り。

十九日。晴れ。

二十日。小雪。

二十一日。朝は薄陽がさしてゐたが、午後から雪になる。花びらのやうな淡雪である。

二十二日。粉雪。朝、ちさ子が今年の卒業生の女子挺身隊の出發を停車場に送りに行くといふので、自分も行つてみる。粉雪降りしきる中を「何々女子挺身隊」の腕章も凜々しい少女たちは、下級生たちの校歌の合唱に送られていさましく出發して行つた。

二十三日。快晴。めつきり春めいた暖かさで、めき／＼と雪が融ける。朝七時の汽車で、十文字の三浦君の令弟の町葬に出かける。小川の雪融水が、雪の下を潜り潜つて、馬のやうに突つ走る野良を、「故海軍二等整備兵曹三浦廣之英靈」と白布に墨痕あざやかな弔旗を先頭にした葬列が、長々とくねつて行つた。

二十四日。薄陽がさしてゐたが、午後は牡丹雪になる。明日は一齊に往來の水割を勵行せよとの同覽板あり。自分は仕事で閉ぢこもつてゐたが、妻の母が一生懸命水割りをする。どこの家もみんな出てやつた。防空上からもこのままでは濟まされないうし、火事だと言つても自動車ポンプも通らない状態では困るといふので、今年から水割りを勵行することになつたのである。まだ五六寸から一尺もある固い氷をシャベルで割つて、堰に棄てるのである。大きな堰のない町中では、往來の兩側に、軒に届くほど高くなつてゐる雪を、シャベルで切つて櫓に積んで、一町も二町も先の川や堰まで棄てて行く。人馬の通る路の眞中は氷だけになつてゐるが、軒下は、冬の間に三度も四度も屋根から降した雪が軒よりも高

くやつてゐるのである。これはなか／＼消えないので、春めいて来ると、たいていの家では、毎日せつせと往來の氷割りをすると同時に、この雪を切り崩して棄てるが、今年は特に町当局の指令で一齊にやることになつたのである。

二十五日。朝のうち陽がさしてゐたが、やがて天氣は崩れる。裏の畑に、雪消しのゴミを撒く、勝手口のわきに一冬投げたゴミが、雪の中から汚なくあらはれてゐるのを、ゴミ取りに掻き入れて、何十回となく畑に運んで散らした。

夕方から降り出した雪が、夜は大降りになつた。

二十六日。晴れ。夜來の雪で、すっかり姿を消した畑のゴミが、午ごろには再びあらはれ、風のない和やかな、木々の芽のふくらむ日和になつた。

二十七日。曇り。

二十八日。雨。名古屋から數日前に疎開して來た妻の弟夫婦の引越の手傳ひに、雨のなかを十文字に行く。

二十九日。曇り。時々晴れ。

三十日。また雪。もぐストローザを取り拂はうかと思つてゐたが、また寒さがぶり返したので、トタン屋さんと呼んで、具合のわるいところを直してもらふ。

三十一日。雪。午後から晴れたが、風が寒い。町の停車場に、東京方面からやつて來る疎開者の姿を多く見かけるとのこと。

四月一日。

曇り、時々晴れ。夜、鈴木さんたちがやつて來たが、その長男の今度中學校に上つた武さんが、眞新しい戦闘帽をかぶつてゐる。顎紐が紙のやうなもので、すぐ切れてしまひさう。徽章もべらく／＼ですぐ折れさうなので、以前の丈夫なのをつけ代へたと言ふ。高女三年生になつた家のちさ子の方は、通信訓練、保育救護その他の新學課が澤山出來て、普通學課の時間がぐんと少くなつたといふ。

今日から郵便料金と鐵道運賃の値上、百キロ以上の乗車制限、しかも横手驛では各區と

も十五枚とかしか賣らず、隣の柳田驛行の人々は、歩いて行けと言つてゐるといふ。

二日。曇つて風が寒い。それでも雪は徐々に消えてゐるらしく、家の裏の田の中を走つてゐる横黒線の線路が、獨り黒々となつた。これは陽や風の當りがいいだけでなく、冬のうち毎日ラッセルが通つて、雪が少いからであらう。近くの山もまだ真白だが、南向きの側は、まだらになつた。ゴミを撒いた裏の畑も、撒いた方の半分は土が見えて來た。雀の聲が日にまし高くなつて來た。

三日。雪。午前は陽がのぞいてゐたが、やがて秋空のやうな空模様になる。さら／＼と霰が降り出したかと思ふと、ちり／＼と灰を撒くやうな粉雪に變り、やがてそれが横降りとなつたかと思ふと、もう猛烈な吹雪であつた。春めいた陽氣はどこへやら、天地をひっくり返すやうな大吹雪である。夜つびて家を吹き飛ばすやうな暴風がすさみ、雪がかなりつもつた。今年は何年より半月も陽氣が遅れてゐるといふ。

四日。昨日と同様、午ごろから天氣崩れて吹雪。北風すさみ、眞冬の寒さである。

五日。晴れ。やうやく荒れがをさまつて、風のない和やかな天氣になつた。雀の聲も一入に丸みを帯びてゐる。町の道路は大方乾いて、子供らが駆け廻つたり獨樂を廻したり、氣ちがひのやうに騒いで遊んでゐる。雪が消えた地べたでの子供らの最初の遊びは、土にまぶれての遊びである。半年ぶりの草履路に、子供らは思ひきり弾む體を打ちつけるのである。夜は淡雪が降つた。

六日。薄曇り。風がなく薄陽が漏れる。屋根で雀が重つて戯れてゐる。午過ぎから青空になつてめき／＼と田圃の土があらはれた。

夕方、子供の手をひいて郵便局に行く。いたるところ往來いづばいに子供らが獨樂を廻して遊んでゐる。數日來の雪圍ひの取り拂ひがすっかり出來て、路幅が急に廣くなつた。

七日。晴れ。家にも雪圍ひとりの人夫が來た。雪にうづもれてゐた池の水が、初めて少し顔を出した。裏の田圃は大方雪が消えて、稻の切株が黒々とあらはれ、森の杉が、田の水にしづかに影を落してゐる。庭の木にいろ／＼な小鳥の聲。

八日。晴れたり曇つたり天気。ストーヴの取りはづしに來たトタン屋さんが、燕を見たと云つた。

九日。妻が初物のヒロコを買つて來た。

ヒロコ

よく晴れた四月の十三日、子供を連れて妻の母たちといつしよに大澤の方にヒロコ取りに行つた。

田圃路に出てからふと振り返ると、手籠を下げた頬冠りの女たちがぞく／＼こつちにやつて來るのが見える。みんなヒロコ取りの連中である。四、五日前に妻が初物のヒロコを町で見つけて買ったが、百目七十錢であつた。小さい束なので、二把もないと家族みんなの口には入らない。そんな値段だからヒロコ取りが多いわけである。

旭川の橋を渡つた先の道路の兩側には、大きな杉丸太が一本並べに何十本となくころが

つてゐて、鋸と鉋を腰につけた皮剥ぎたちが、せつせと杉皮を剥いでゐた。後で聞いたがこれは近くの旭岡神社から軍需資材として伐り出されたものだといふことであつた。

その少し先から、私たちは田圃に降りて、畦づたひに梨畑の方に行く。一昨日も私はヒロコ取りに來た。そのときは、まだ田のあちこちに雪が消え残つてゐたが、もうすっかり消えて、田の面は稻の切株が白く乾きかけてゐる。

青々としてつや／＼と光る牛の舌や、血が滲み出たやうなすかんぼが、畦のあちこちに萌え出してゐる。

「三月の節句のお雛さんは、ヒロコと田螺つがの和物あえものを食はないと、箱に歸られないと、言つたものですよ」

田螺はゐないかと、しきりに田の中を見廻はして歩いてゐた母が言つた。しかし田螺はまるで見當らなかつた。乾いた田圃に田螺が生きてゐられるわけもない。子供の時分の記憶を辿つてみると、當時の田には、いたるところにころ／＼してゐたやうな氣がするが、

するとあれはまだ濕田だつたのだらう。

ヒロコは春の野の幸の魁である。シドケ、ホンナ、ウド、ワラビ、ウルヒなど、春の山菜はかぞへ切れないほど豊かであるが、いづれも梅や櫻が咲き、野山が色づいてからのものである。春を待ち切れないやうに、残雪の下から萌え出して、いち早く人間の口に入るものは、獨りヒロコだけである。

ヒロコは蒜あしであらう。東京で言ふアサツキである。ウドやワラビなどの山菜が出るにはまだ春寒く、畑のフクダチや葱やホーレンソウなども、まだ雪の下から起き直るには間があるといふ早春に、早くも春の野の香りを味ははせて呉れる。野菜の配給が、冬のうちに一度か二度しかなかつたこの春は、それがどれだけ人々をほつとさせて呉れたか知れなかつた。田舎でこんなに野菜不足とは不思議のやうだが、それにはわけがあつた。昔から米の國である秋田は、他縣にくらべて畑の反別が少い。戦争前から、自分の家で食ふだけのものしか出來ず、賣るほどの野菜はなかつた。だから町の人々は、關東や關西から輸入

した野菜を多く食つてゐた。そこへもつて来て、去年は例年になく早魃であつた。田の方は、今では貯水池や堰が完備して水利がよくなつてゐるので、大して旱害を受けなかつたが、畑の方はまるつきりいけなかつた。冬になると町にはまるで野菜のかけを見ることが出来なかつた。

どれだけ人々はヒロコの萌え出すのを待つたことだらう。その初物が一握り七十錢も八十錢もしたのも無理はなかつた。雪の下に穴籠りして、まるで青物を見ることが出来なかつた人々は、眼に滲みるほど黄色いヒロコを口に入れ、ふんと強く鼻に来る野の香りを味つて、初めてほつと息をついたのである。

山裾の梨畑には、まだ雪がまだらに残つてゐた。梨の木の下だけは、いち早く雪が消えて、濕つた黒土にべつたりと貼りついてゐる朽葉が、陽に焦げるやうに乾き初めてゐる。その朽葉を突き破つて、ヒロコがまるで黄色い粉を振り撒いたやうに、いちめん萌え出してゐる。

ごそつと濡土を掘り起すと、小さいラッキョウみたいな愛らしいヒロコの白い根が、幾つものむつくりと出て来る。その土をふるひ落して籠に入れる。

梨の根もとは到るところ、掘れども掘れども盡きないヒロコである。私たちの小さい手籠は見るといつぱいになつて行つた。

淡い青さに晴れ渡つた空に、強い枝の張りを見せてゐる梨は、もう筆の穂先のやうな芽をふくらませてゐる。歩いてぬからぬ堅い残雪のあちこちには、兎の糞が點々と散らばつてゐた。この一つ／＼鑄型で打ち出したやうな真丸い茶色の糞は、よく見ると、これもまた一つ／＼丹念にちりばめたやうに、とつぷりと半ば雪の中に沈んでゐる。この小さい植物の繊維のかたまりは、春の陽をいつぱいに吸つて、周りの雪を融かしてゐるのである。いつぱいになつた籠を下げて、畑の下の堰でヒロコの泥を洗ふ。青澄んだ山の雪融水が、しゅん／＼と音立てて矢のやうに流れ、一握りのヒロコを漬けてざぶ／＼と二三度揺ると、忽ち泥はすつかり洗はれて、茸根は雪のやうに白くなる。水はまだ手が切れるやうに冷い。

草取り

朝のうちは大澤嵐が涼しいが、子供らの登校斑が暇路につづくころには、もう家の中でさへじく／＼汗が滲み出るほど暑い。

五六人の男女入りまじった草取りが、稲の緑が黒ずみ初めた田の中を、高くはね上げた尻だけを見せて、横隊に一線になつて動いて行く。

田の水は煮え立つやうに光つてゐる。水嵩の増した堰には赤錆びた水垢が浮き、連日の雨でさへじく／＼とぬかつてゐる。打ちつづいた雨がやうやく晴れて、草取りが始つたのである。

絶えずがぼ／＼といふ水音をたてて、草取りたちは、せはしく株間を掻き廻して行く。一寸見るとただ滅茶苦茶に掻き廻してゐるやうに見えるが、氣をつけてみると、一つ／＼の株の根もとの土を掻いて、それをまた元に押し込んでゐるのである。ただその動作が馴れで素早いので、さう見えるのである。掻かれた田の水は白く濁つて、いやが上に熱く光つてゐる。

暑い盛りのこの草取りは、野良仕事のなかでも、もつとも骨の折れる作業である。汗は拭つても拭つてもとめ度なく眼に流れこむ。それをいち／＼拭つてゐたのでは仕事にならない。稲の葉が顔を引つ掻き、眼にちか／＼と入る。冷害に耐へるやうに改良されたこのごろの品種は、稈が短いので、殊更に眼にささるやうになつた。手が腫れて、しまひに爪が摺り減つて血がにじみ出る。

大きい百姓になると、草取り日数が一ヶ月にも及ぶ。初めから雁爪で三番草まで取つたのである。このごろは、田植のあと十日ほどで車くるま(除草器)をかけ、それからまた一週間し

て二番草を取るが、三番草まで手の廻る家は滅多にない。

この草取りほど、手をぬかうと思へばぬける仕事はない。いや、しつかりやるとなると、これほど骨の折れる仕事はない、と言つた方がいい。だから、町の婦人會とか女學校の生徒などの奉仕作業では、すぐやり直さなければならぬことが間々ある。

根もとの土をよくほぐしてやると、稲は太陽の滲透がよくなつて、分蘖が多くなり、生育がよくなるが、株間の草をとつただけでは効果は少いのである。だから、精農ほどこの草取りに骨を折る。

煮え返るやうに暑い田の中で、翌る日は腰がのびないほどの作業に、一ヶ月にも及んで連日汗をしぼりつづけるのである。

早 魃

夏は必らず故郷に歸ることにしてゐる私は、こゝ數年つゞけて秋田縣の横手で夏を過したが、今年（昭和十八年）ほど暑い夏も珍らしかつた。雪國の秋田も夏は相當に暑いが、家中で裸になつてゐても汗をかかといふことは少い。その點、夏だけ秋田で過すことは避暑と言へば言へるのだが、今年の夏は、とても避暑どころの話ではなかつた。毎日じり／＼と照りつけて、道路はからからに乾き、畑の作物は萎え、ひどい草いきれと照り返しで、家の中でも身の置きどころがなかつた。

旭川の向うの山から吹き降して、そよ／＼と稻田を渡つて來る風で、町端れの家は日中

も涼しく、日が暮れるにしたがつてぐんぐん冷たさを増して、夜はむしろ寒いほどなのが、夜になつてもそよと空気を揺る風もなかつた。たまさかに、はら／＼と雨粒がこぼれることがあるので、やつと降りだしたかなと、縁側にで、空をのぞくと、もう雲はどこか消えてしまつて、一層じり／＼と照り出す。来る日も来る日も空はからりと晴れ渡つてゐる。避暑どころか、まるで東京から暑い國にわざ／＼やつて来たやうなものだつた。

「もう何十日も降らないすな」

七月の末に横手につくと同時に、私はさう聞いたが、それから更に照りが續いて、やうやく雨が降つたのは、八月の半ばであつた。田植ゑの直後からお盆近くまで殆んど一度も雨は降らなかつたわけである。こんな旱天ひでりといふものは、私の子供の時分の記憶にも全くない。

横手の町には、名物の朝市がある。多くの市は三日とか五日とか、何日か間を置いて出るものだが、横手盆地の村々と奥羽山脈やまひたの山内村との、野菜と果實の産地を溢へてゐるこの町には、毎朝青物市が立つ。

ところが、ある朝行つて見ると、まるでその青物賣りたちの姿が見えない。町角の商店の軒下に、百姓婆さんたちが四五人ゐたが、往來に藎を敷いて並べてゐるものは、お盆の蓮の葉や簾すだれだけであつた。いつもは茄子、胡瓜、西瓜、まくわ、枝豆、トマト、芋と、あらゆる畑のものが、往來狭しとあふれてゐるのが、この有様なのである。

間もなく町當局はこの朝市を禁止した。同時に町民に對して、直接生産者から野菜を買ふことを禁じた。この名だゝる野菜の集散地の町民は、やがて一戸當り茄子十個とか廿個ぐらゐの配給を受けるやうになつた。

これだけ聞くと、大變な不作のやうに思ふかも知れないが、本當は至極くのんびりしたものだつた。稲は日ましに青さを増し、花を開き、やがて穂を垂れて行つた。青々とした田圃にとりかこまれた町は、極めておだやかな眺めであつた。あちこちにお祭りがあり、村々では盆踊りが賑やかであつた。横手の町の送り盆の花火は、今年も夜更けまで空を美

しく彩どつた。夏の夜の花火ほど、清々しくあでやかなものはない。わけて、横手の送り盆の花火は、東の山並から静々と昇る満月と相對して、その美を競ふ風情は得も言はれな
いものがある。

一昨年は、その蛇の崎河原で、首筋を痛くして、頭上の空に打ち上げられる花火を見物したが、今年は家の二階に上つて遠くから眺めた。その結果は、花火は少し離れて眺めた方がより美しいといふことを知つた。拭つたやうに晴れた夏の夜の星空に、次々と花の中から花が咲き出す百花撩亂の花火のあでやかさ。それは、町の人々の眼を楽しませるだけではない。四里も五里も遠くからも美しく眺められるのである。決戦下の増産に汗をしほつてゐる附近の農村の人々に、それはどんなに多くの慰めを與へたか知れなかつた。

畑は乾いてゐたが、田圃はどこも水があつた。道路は眞白に乾いてゐたが、その道路に添つた堰には水があつた。あちこち歩いて見ても、水のない乾いた田圃は殆んどなかつた。私は人の顔さへ見れば、作柄のことを口に出したが、誰の返事も決つてゐた。

「今年は上作ですよ」

何十日の間一雫の雨も降らないといふのに、誰もあわてた顔も見せないのであつた。旱天に凶作なし——今年ほど、この言葉のびつたりと當てはまる年はない。冷涼な奥羽地方は、陰濕多雨の年こそ、冷害の危険があるが、照ることはいくら照つても差支へないのである。いや、照れば照るほどいい。したがつて作柄は上乘であつた。

八月半ばに雨が降り始めるまで、畑は危険に迫られてゐた。茄子や胡瓜は萎えはじめ、西瓜は一本に四つも成るのが、今年は一つしかならない。高い苗を買つて、子供の頭ほどしかない小さい奴一つでは、勘定にもならないとこぼしてゐた。去年は五十錢で十分だつた茄子が、今年はその倍の一圓買つて漬けても、一日でなくなつてしまふ。今年も茄子も食はれないと町の人々はこぼしてゐた。どこの畑も眞白に乾いて秋大根を蒔くよしもなかつた。

それが一旦降り出して、豪雨が三日ほどつゞくと、急に野菜が町に出て來た。現金なも

ので茄子などは雨が降り出すと急に花を開いて、ぞくぞくと實を結びはじめたのである。

そんな譯で、畑作物はお盆近くまで危殆に瀕してゐたが、稲作の方は順調であつた。水の多い山間部は、いくら照つても平氣なものであつた。平地でも、特に水利の悪いところを除いては、見渡すかぎり豊かな實りの黄金の波であつた。殊に冷涼な地帯である縣北は豊作であつた。

それに、稲作にとつて大敵である稻熱病が殆んどなかつた。稻熱病は濕潤な蒸々した氣候に多く、照りつゞけのときには餘り出ないのである。おまけにもう一つの敵である入内雀も今年あまり姿を現はさなかつた。私たちの子供の時分には、田圃の中に假小屋を設けて、石油罐をがらく／＼鳴らして、雀追ひしてる光景を到るところで見えたものだが、今年はさういふ雀追ひの光景どころか、案山子さへ多くは見られなかつた。

ちやうど稻の花が咲き、穂の出る時分に、北海道から渡つて来る入内雀の群は、八郎潟の沿岸地帯や雄物川の中流の平野あたりには、殊に何千何萬と群をなして、實り始めの稻を食ひ散らすのであるが、その雀の數は無慮百數十萬、食ひ散らす米は數千石と推定されてゐる。

それが雀追ひの光景が殆んど見られないので、私は勞力不足でそんな暇がないんだらうとぼんやり考へてゐたが、今年は不思議にその強敵が餘り姿をあらはさないのだといふことであつた。

なるほど、さう言はれてみると、稀に百羽ぐらゐの群を見受けることはあつたが、入内雀の大群らしいものは見あたらなかつた。流石猛威をたくましくする入内雀も、この旱天で元氣を失つて、津輕海峽が渡り切れなかつたのだらうか。

「この邊は水の心配は無いやうですね」

私の滞在してゐる家の近所は、来る日も来る日もかん／＼照るのに、堰には綺麗な水が流れてゐるし、田の畦はじく／＼ぬかつてゐた。私は不思議な氣がして、さう言はずにはゐられなかつた。

「さうですよ。この邊はどんな旱天でもびくともしないんですよ。若いころ百姓をしてゐた鈴木さんは、農事に明るかつた。

「よつほど氷利がいゝんですね」

「一の堰の水がこの邊一帯にかゝるんですよ」

「一の堰といふと——」

「その堰が二の堰、この上にあるのが一の堰です」

この堰は私たちのゐる家のすぐ近くで、旭川を二分して町の中を掘り割つて流れてゐた。一の堰はその上流の田圃越しに見える本郷部落にあつた。

「傑いものだなあ」

私はその一本の堰の力に、感歎せずにもられなかつた。

「みんな大蒜神様のおかげですよ」

「何です、それは——」

「そら、あそこですよ」

鈴木さんは立ちあがつて、田圃越しに見える森の方を指した。

「屋根の上に杉木立が見えるでせう。あれが大蒜神様です。お祭りの時は賑やかなものですよ」

なるほど本郷部落の茅葺屋根のかけから杉木立が顔をのぞかせてゐる。

「その神様がどうしたんです」

「一の堰は、その大蒜神様が掘つたんですよ」

鈴木さんはさう前置きして、その由來を話した。

それは仙臺の方から流れて來た相撲取であつたが、本郷まで來たときに病氣で動けなくなつた。しかし幸ひに世話する人があつて助かつたが、やがて元の丈夫な體になつた相撲取は、名主に向つて、何か村で困つてゐることはないかと云ひ出した。名主は首をひねつてゐたが、困つてゐることゝ云へば水の少ないことだと答へた。横手澤から流れ出る水が

わづかに田圃にかかつてゐるが、澤が小さいので一寸旱天がつゞくと、すぐ渴れてしまふのであつた。それを聞いた相撲取は、間もなく獨力で堰を掘り始めた。

山際を流れてゐる旭川の水は、一段高くなつてゐるこの邊の田圃にはかゝらない。その水をかけるのには、川上の丸山の森にトンネルを通して堰をつくるより他に途はない。しかしそれは容易ならぬ難事業であつたので、誰も進んで手をつけるものはなかつた。それを相撲取が一人でやり出したのである。百數十間のトンネルを一人で掘る。その困難は並大抵のものではなかつた。流石の相撲取も途中で病氣が再發して、どつと病の床についてしまつた。しかし、一念凝つた相撲取は、病床にあつても絶えずトンネルを貫通すること考へつゞけてゐた。一夜、神様が枕元に立つて、俺について来いと云つた。相撲取はよろ／＼と立ち上つて、眞暗な戸外に出て行つた。やがて、小廣い野原に出ると、神様は告げた。丈夫になりたければ、こゝに生えてゐる草を食ふがよい、と。夜の明けるのを待ちかねて、そこへ行つて見ると、大蒜がいちめんちんに生えてゐた。その日から相撲取は大蒜を食ひはじめたが、不思議にめき／＼と丈夫になつた。いや以前にも増して丈夫な體になつて、トンネル工事はどん／＼はかどつた。

大蒜の出る初夏の頃お祭りがあつて、その日にはこの大蒜神様に、遠近から澤山お詣りにやつて来る。それを食ふと丈夫になると云つて、大蒜を持つて来て、神様に供へ、半分頂いて行く。しかし、この頃では、供へた大蒜をみんな持つて歸りますよ、と鈴木さんは笑ひながら言つた。

今日、どんなに旱天が続いても水に心配せずにもられるのには、かういふ私欲を絶した人人の血の滲む努力があつたのだ。一望の豊かな稔り田を眺めながら、私はひそかな感謝を胸に抱きながら、一日鈴木さんと連立つて、その神様にお詣りに行つた。

なるほど、小高い丸山の根もとを、トンネルが貫いてゐた。山の上に乗つて見ると、旭川を分水した一の堰は、すぐ眼の下にあつた。トンネルがその丸山の地下を潜り抜けて、堰となるところの邊りの杉木立の中に小社があり、それが大蒜神様であつた。

然るにこの邊一帶の農家に與へてゐる絶大な恩恵にも拘けらず、それは何といふ謙讓な相撲取であらう。小社には、たゞ丸山神社と讀まれるだけで、その相撲取の名前も事蹟も一切記されてなかつた。ここに記されてないだけでなく、その事蹟は一向明らかになされてゐないのである。私はいろいろ探つて見たが、年代さへ分らなかつた。たゞ、小社にある二十三夜塔や庚申塚に、文化安永などの年代が刻まれてゐるから、それ以前のことであるだけは知られる。

しかし、これはこれでいゝだらうか。われわれには、かうして草藪の中に埋もれてゐる過去の傑れた人々の事蹟を、掘り出す義務があるのではないだらうか。さういふ犠牲的な偉大な事蹟を掘り出して知らせることは、どれだけ今日の人々を刺戟し奮起させるに役立つか知れないのである。龜田の久藏が、獨力で斷崖の道路を切り開いた眞人のへぐりは、こゝから數里の間にあるが、この事蹟を明らかにしたのは、現在増田町の女學校長をしてゐる沼田平治氏であることを、私はこの夏沼田氏に會つて初めて知つた。それも、ついでのごろのこととて、それまでは、偉大な龜田の久藏の事蹟も、久藏自身が建てた石碑が草のなかに折れて埋もれてゐるまゝに、誰にも知られなかつたのである。

水利の好い田所は寧ろ豊年でも、水のないとところと畑作のひどさは、やはり雨乞ひをさかんにさせずにはおこなかつた。黒沼といふ沼の水神さまには、日に日に澤山の雨乞ひ人が押しかけた。その中に心得ちがひなものがあつて、こんな風に雨を降らせて呉れと云つて、沼に向つて長小便をした。よつほど泳へて來たとみえて、あきれ返るほどの長小便であつた。ところが、その男は戻り路急に氣持がわるくなつて、夜になると重病になり、夜明けを待たないで死んでしまつた。

八月某日の夜の、横手近くの旭岡神社の境内は、雨乞ひの人々でいつぱいであつた。遠近の水不足の村々からやつて來た人人が堂籠りして夜を明すのであつた。私も眞夜中に出かけて行つて見たが、何百段の石段を上つた丘の頂上の神社の拜殿のなかは、まるで俵に藪をつめこんだやうに、堂籠りの婆さんや女房連であふれてゐた。

そのせむか、翌々日の午後から、やうやく雨が降り出した。その日、一時間ばかりの土砂降りの雨のあと、鍬で畑を掘つて見ると、何十日も照りつゞけた土は、僅か一寸足らず濡れてゐるだけであつた、しかし、翌る日の雷鳴をともなつた夜つびての豪雨で、畑はやうやく生氣を取り戻した。

雨は四五日の間、殆んど降り續けに降つた。ことに三日目の豪雨は、奥羽線の汽車を不通にし、院内地方と仙北の檜木内に多少の水害を興へた。しかし、横手の人人が恐れてゐたやうな大きな水害にはならず、やがて天候は立ち直つて、おだやかな實りの秋を迎へた。今年は五十年來の旱天と云はれた。何故なら今から五十年前の明治廿七年が、ちようどこんな天候であつた。しかも、その年には横手は秋に入るところ大洪水になつた。今年も洪水が来る——或る古老がさう云つたといふ話は、學校の生徒たちの間でも、町の常會でも取沙汰された。

それが單なる取沙汰に終つたのも、言はゞ神助であらう。決して多少は荒れる二百十日も、風らしい風も吹かずに過ぎて、稲田は豊かな黄金色の實りに入つたのである。

稗ぬき

朝夕はめつきり涼しくなつた。昨夜は家の中ですいつちよんが高々と鳴いて、早くも秋を想はせた。

稲が黄ばんで穂を垂れはじめた裏田で、手甲菅笠の女が二人、のんびりと稗抜きをしてゐるのが見える。

道路の向うの田に、雀が群れて稗りはじめた穂をついばんでゐるが、追ふ者もない。鈍い陽が照り渡つて、眠いやうな晝である。

黄ばんだ稲の間から、茶色の花を咲かせた稗が、ひよこん／＼と伸び上つてゐる。氣をつけてみると、それは米に稗を少し混ぜて蒔きでもしたやうに、おびただしく出てゐる。食ふ稗ではない、牛に食はせるより外ない稗であるが、抜くのに都合がいいので、稲の間から高く首をぬき出した今頃取ることになつてゐるのである。

紺緋の袖無しに手甲地下足袋、手拭の頬冠りして菅笠といふ、甲斐々々しい身支度の女は、矢を負つたやうにツナギ藁を背中にしてゐる。腰を屈めて、右手の小鎌で稗の根もと近くから切つては、一本づつ左手に貯めて行く。そして一握りたまつたところで、背中のツナギ藁を取つて束ねて、近くの畦にぽんと投げてやる。

その動作が實にゆつたりしてゐる。四五株向うに立つてゐる年寄つた女と二人、平行して同じ方向に取り進んで行くのだが、いつまでも同じ場所に立つてゐるやうに見える。そして日暮近くまでやつてゐるが、田の三枚か四枚もやり上げたらか。

昨日も今日も、ほかの田には餘り稗抜きの姿が見えないところをみると、これは人手に餘裕のある家なのであらう。

束立

横手附近では、今でも稲を乾すのに束立をやつてゐる。束立といふのは、穂塙に積む前に、稲束を田の中か畦に直かに立てるのである。

私たち一家が東京を引き拂つて横手に着いたのは、去年の十月三日であつたが、ちやうど土砂降りの雨であつた。翌る日も晴れたり降つたり秋の空模様であつたが、その霽間をめぐけて、すぐ家のそばの田圃で、數人の年寄たちが、せつせと稲を刈りはじめた。

大澤の山際まで田圃はすつかり刈り終へて、残つてゐるのは僅かに私たちの家の周りだけであつた。見渡すかぎり、ちやうど人の背丈ほどの高さの穂塙が黒々と立ちならんでゐる。去年よりも十日も早いと、あとで家の裏の田をつくつてゐる爺さんが言つてゐた。この夏は五十年ぶりの早魃と言はれて、田植のすぐあとから八月の十二日まで、一滴の雨も降らなかつた。そんなに照つたために、登熟が早く、稲刈もくり上げられたのである。

年寄たちは申し合せたやうに、振り鉢巻に胴亂を腰に下げ、草鞋がけの姿である。ゴム靴が無いのだ。すぐ降り出して来る雨の用意に、蓑と笠が畦に置いてある。

小さい一枚の田を刈り上げると、年寄たちはすぐに片つぱしからそれを束立にしていつた。二手刈の分をくるつとタバネヅナで束ね、穂の方を二つに分けて、それを足にして、結へた方を田の面に立てる。それを二束、ルの字型に抱合せに立てて、次から次と一列に十束ほど立てると、その押へに二三束乗せる。かうして畦から畦まで一列に立てて、一枚の田の面に四列か五列の束立をした。

昨日からの雨で田の面はじく／＼と濡れてゐる。その水に束立の穂が無残に浸つてゐる。乾燥によくないといふので、縣當局が束立を廢めさせようとしたのは、随分早いことに

屬する。明治三十年代から大正にかけての秋田縣の農事改良に非常に功勞の多かつた齋藤宇一郎も、熱心にその廢止を説いた一人であつた。乾田馬耕の實施、堆肥舎の設置、東立の廢止の三縣令が公布されたのは明治三十八年である。

秋田の米が、陸羽百三十二號の名と共に聲價を得るやうになつたのは、米穀検査が嚴重に行はれるやうになつた比較的近年のことで、それまでは秋田の腐れ米と言つて、深川の市場でも相手にされなかつた。検査がやかましくなる以前は、一に飯米、二に賣米、三に小作米といふ調子で、乾燥のわるい碎米混りの劣等米が多く輸出され、秋田米は米としては使はれないから醋米として使ひ棄てにするのだ、などと言はれさへした。この腐れ米の第一の原因としてかぞへられたものが、東立に外ならなかつた。

それが次第に改められて、秋田米が聲價を得るやうになつた大正の末から昭和にかけては、東立の習慣も多く改められて、もう例の三縣令も必要のないものになつた。

しかるに、この横手附近や山間部では、依然としてこの東立が行はれてゐるのである。平鹿や雄勝の平坦部では田の中に立てるが、山間部の水田では畦に立てる。かうして三日か四日天氣がつづいた後に、初めて穂塙に架けるのである。

縣令で禁止されさへした東立が、どうして依然として行はれてゐるのか、私は何人かの人にたづねたが、誰からもはつきりした答へを聞くことが出来なかつた。別にこれといふ理由がないところをみると、漫然と昔からの習慣をつづけてゐるだけのことであるらしい。ただ「さうしないと、稗からがよく乾かない」といふ點だけは、どの人の返事にも殆ど共通してゐた。

東立は穂の方を下にして立てるから、稗はよく乾くのである。しかし、棒架けにしても、積み返せば乾くはずであるが、この地方の人に言はせると、初めから棒がけにしては藁がよく乾かないといふのである。

なるほど、稗は乾くかも知れないが、東立では穂を水浸しにし勝ちである。稗を乾かすために、大事な穂を水浸しにするといふことは、なんとしても理窟に合はない。手間から

言つても、初めから棒架けにして、一度返すのと、一旦東立てにして、さらに棒架けにするのでは、後者の方が手間がかかる。

どう考へてもその言分は腑に落ちなかつたが、この土地に腰を据ゑて秋から冬へと月日がたつにしたがつて、私はだん／＼それが分るやうな氣がして來た。

といふのは、この邊は實に天氣がわるいのである。何十年來といふ早魃で、晴天が無闇につづいたあとなので、餘計に去年の秋から冬は荒れたのかも知れないが、來る日も來る日も雨であつた。あと四五日で平野の稻が綺麗に片づいてしまふといふときになつて雨になつて、稻揚げは十日も遅れてしまつた。

それでも十月のうちは、茸狩りに出られる秋晴れの日が何日かあつたが、十一月に入ると、もう天氣のいい日は殆どなかつた。冷い雨が毎日のやうにつづく。朝のうちは陽が照つてゐるが、氣温が昇るにつれて日本海の水蒸氣が西風に送られて來るらしく、晝近くなると、西の方からうす／＼と曇りはじめて、午後は冷い時雨になる。私は何度これにだまされて冷い思ひをしたか知れない。天氣がよくても傘の用意を忘れるなどいふ、尊徳の言葉は、たしかに私に必要なものであつた。

やがて初雪がおとづれ、それが年の暮から根雪になると、もう毎日の雪であつた。しかし、眞冬の方が、むしろ時たまに晴れた日があつた。一月二十九日の珍らしい拭つたやうな青空の雪のまばゆい晴天の晝に、三男が誕生した。晴之助と名づけた。しかし、そんな日は珍らしかつた。

春になつたらぼか／＼した天氣がつづくだらうかと、私はたのしみにしてゐたが、それも期待したほどでなかつた。三日と晴天のつづくことがなく、うやむやのうちに雪が消えた。今年も陽氣が例年より半月もおくれて天氣は依然ぐづついてゐる。我慢が出來なくなつたとでもいふやうに、梅と櫻がわづか一日ちがひに一縷に咲いて、三日目には南風と雨にたたかれて汚なくなつてしまつた。

東京の天氣などにくらべると、今年の天候不順を割引して考へても、何とも言ひ様のな

いほどの天氣のわるさである。測候所の観測では、それほど雨量が多い土地といふわけでもないやうであるが、私の感じでは日照時間の少いことおびただしいものがある。東立はかういふ天候に關係があるのではないかと思ふ。

三町五反

年の暮の卅日に、湯澤驛から一里西北にあたる村に、新山君をたづねた。新山君とは文通してから十年以上になるが、會ふのは初めてである。この秋、東京を引揚げて、横手に腰を据ゑた私は、新山君の居村がすぐ近くであることに氣がついた。湯澤までは汽車で卅分しかかゝらないのである。そこで、私はすぐに訪ねて来てくれるやうに葉書を出したが、供出米の調整や何やらで多忙で動けないといふ返事であつた。それから二ヶ月になつて、やうやく少し樂になつたから出かけて来てくれといつて來た。

隣組に一足だけ配給されたのを貰つたゴム短靴に、スキー帽といふ身づくろひの私は、

冷い雨のそぼ降る雪の野路をせつせと足を急がせた。振返ると湯澤の町は、次第に後ろに遠退き、町の後ろから、院内、由利方面にかけての連山が青い靄の幕の上に、いかめしい雪山の姿をくりひろげて來てゐた。

奥羽山脈と出羽丘陵との間の盆地は、一望ただひろがつてあちこちに桑の木と稻架杭が積んであるのが見えるだけである。

二つ目の部落が見えはじめたころには、土産の風呂敷包が、ぐつしより雨に濡れてしまつてゐた。

部落の入口の右側には白壁の大きな倉庫があり、その向ひの農家の納屋には、二人で糶摺機を押ししてゐる姿が見えた。後で知つたが、その倉庫の前は産業組合で、村役場はすぐその向側にあつた。

倉庫の入口には、今運んで來た供出の米俵がころがり、櫛をつけた馬がゐた。着ぶくれ

七子供らが箱籠で遊んでゐた。

そこから田圃路を少し行くと、蕙と藁で雪圍ひをした家が、びしびしとつづいてゐた。

あつちに三軒、こつちに四軒といふやうな村とは一寸異なつてゐた。

左側の家の前で遊んでゐた國民學校の四五年生ぐらゐの子供に新山君の家をたづねると直ぐはつきりと教へてくれた。

「向うの十文字路を、左さ行つて、一番端れから二軒目の家だ」

その二軒目の家は、その邊では比較的大きい家であつた。

裏の方で稻扱きの音がしてゐた。樂になつたとはいつても、まだ閑ではないのだなと、私は思つた。よつほど折を見はからつて來たつもりであつたが、やつぱり仕事の邪魔することになる氣がして二の足を踏まざるを得なかつた。

腰をかがめて入口を覗くと、新山新太郎といふ表札が出てゐた。といふのは、入口は深く雪圍がしてあるので、さうしないと見えないのである。その新しい小さい木片に楷書で認めた表札を見た瞬間、私は初めて、新山君が長男であることに氣がついた。實に馬鹿氣

た話である。太郎といふからには、長男に決つてゐるやうなものだ。それなのに、その瞬間まで、何故か私はさうは考へてゐなかつたのである。

それにはしかし、理由が無いわけではない。といふのは、私が新山君を知るやうになつたのは、新山君の書いた小説を読むやうになつたからであるが、十數年前初めて讀んだその小説が「十一人目の兄」といふ作品であつた。今から考へると、その「十一人目の兄」は、新山君自身に當るのだらうが、そのとき私はさう考へなかつた。いづれ澤山の兄弟らしいが、新山君はいつたい何番目なのだらうと、私はほんやり考へてゐた。まさか、一分隊もの弟妹をぞろ／＼後ろに従へた長男だとは、想像もしなかつたのである。

母親らしい人が一寸顔を見せたが、新山君はなか／＼出て來なかつた。裏の方で稻扱きをしてゐるらしかつた。

やがて、障子のかげから髯だらけな顔があらはれた。

「なんと、もじゃなくて」

股引姿の新山君は、さう言つて臺所の圍爐裡かまどに、私を導いた。もじゃなくてといふのは、取り散らかしてゐるといふ意味である。

見ると家のなかには、實に澤山の人があつた。板の間にづらりとお膳を並べて、お爺さんお婆さんを初め、多勢御飯を食べてゐる。そのほか、娘や子供が何人もその邊にゐた。

やがて私は、入口に近い方の神棚のある室で、晝飯を御馳走になつた。その室には調整したばかりの何俵かの米と、眞新しい自轉車が置いてあつた。

神棚のわきには若い軍人の寫眞があつた。

「一人戦死して、現在二人行つてゐるす」

出征してゐるのは二男と四男で、その寫眞は戦死した三男なのであつた。

「十一人も兄弟ゐるども、家で働く者はゐないものだすをな」

新山君は流石に疲勞の深い顔で言つた。その多勢の兄弟と兩親とお婆さん、それに自分の子供と算へると、新山君の肩にかかつてゐる人數は、實に夥しいことになる。兩親は病

弱なために、新山君は國民學校を出たばかりの五番目か六番目の弟を相手に、三町五反歩の田を一手につくつてゐるのである。三町五反歩と言へば、一反歩五俵としても、百七十五俵の米を供出するわけだ。その完遂期が後廿日に迫つてゐる。

それまで漠然と考へてゐた新山君とは、まるつきり違つた重大な銃後の責務を一身に荷つた人間として、新山君は私の前に重々しく立ちあらはれ始めてゐた。

シヨツチル

私は東京にゐる間も、ずつとシヨツチルを用ひてゐた。魚を煮るのには、醤油よりもこの方がうまいからである。時々百貨店の食品部に出てゐるのを求めて來たり、秋田に行つたときに持つて來たり、兎に角臺所からシヨツチルを絶やしたといふことは滅多になかつた。

それで近所の人や知人の家でも、自然にこの味をおぼえるやうになつた。初めは一寸ナマ臭い匂ひが鼻につくので、私は強いてこの田舎料理を人に強いたことはないが、やがて田舎を全然知らない東京育ちの知人さへ、分けて呉れと言ひ出すやうになつた。

シヨツチルは、言はば魚の鹽漬から出る汁である。半透明の飴色をしてゐて随分鹽辛いので、小匙に二つか三つの分量で充分である。魚と野菜を水煮して、煮え立つて来たところに、淡く色のつく程度にちよつぱり入れて食べると、あつさりしたい味である。秋田ではその季節にはハタハタや生カドであるが、どんな魚でもよく、鯛か平目か鰯のやうな淡白な白身の魚を最上とする。野菜は葱、茄子、胡瓜、ほうれん草、白菜など、あまりアクの強くないものなら何でもいいし、それに豆腐があれば尙いい。

語源をやかましく詮議立てするまでもなく、シヨツチルは鹽汁に間違ひないだらう。魚を鹽漬にして置くと、だん／＼汁が溜つて来る。その汁を掬み出して漉して火を入れたものである。それを鱻詰にして賣り出すやうになつたのは、近年のことだらう。魚は何と限つたものではなく、近頃の鱻詰には、魚をおろしたあとの頭や骨や腹などの所謂ザツバを漬けたものがあるといふが、ハタハタ(鱻)のシヨツチルを最上とする。

純粋なハタハタだけを漬けてこしらへたシヨツチルは、ハタハタの本場の男鹿半島から
出る。私は北浦のそれを貰つたことがあるが、透明ですつきりしてゐて、しかも濃い味があつた。

その印象からこぢつけて言ふのではないが、私はシヨツチルとハタハタとは、切つても切れない関係があるのではないかと思つてゐる。

秋田とか土崎とか、これを多く用ひる地方が海岸部であることから考へても、その發生は海岸に近い地方でなければならぬ。それも魚の多く獲れる漁村に近い地方である。なるほど山間部でも、ハタハタやカドを鹽藏するから、シヨツチルは出来るわけだが、煮て食ふ生魚が無い。それほど古くない生魚が山間部まで入るやうになつたのは、交通の便のひらけた近年のことである。やはりこれはどうしても、生魚の手近に入る海邊の地方でなければならぬ。

鹽や醤油の切れたときに、魚の鹽漬の甕にたまつてゐる汁で、魚を煮て食つてみたら、それが案外にうまかつた。これはいいと、ちよい／＼やるやうになり、それが次第にひろ

まつて、やがてはシヨツチルをつくるために魚を漬けるやうになつた。

これにはシヨガラカヤギ(鹽辛貝焼)や味噌貝焼が先行してゐるかも知れない。イシヤジャや烏賊の鹽辛に大根卸しの貝焼や、鹽や醬油代りに味噌を用ひる味噌貝焼は、どうしてもシヨツチルよりは原始型である。それからの思ひつきであつたかも知れない。

で、その魚の種類であるが、山間部の方でこそ春の鯨も鹽漬けにするが、すぐ夏と秋の漁をひかへてゐる海邊では、その鹽藏が多く行はれるわけではない。さうすると、これはどうしても、漁のない冬季の鹽漬けである。

ハタハタは霰の降るころに獲れる。早い年は雪が降りはじめてすぐ正月である。どこでも來年の用意に、澤山ハタハタを漬けるのである。冬場は腐るといふ心配がないばかりか、暖い時分とちがつて、その溜り汁はごた／＼と濁らない。尙更淡泊なハタハタの汁は澄んでゐる。

これはどうしても、シヨツチルの發生は、ハタハタの漁場の近くの町でなければならぬいと、私の考へはそこに落ちて行く。

秋田人は口がおごつてゐると言はれる。それが、醬油代りに窮餘の一策として用ひた鹽汁に原因してゐると考へると、一種の皮肉を感じざるを得ない。

八郎湖の白魚や生鯨にサシビロのシヨツチル貝焼を食つて、はじめて雪國の春の喜びは満される。小さい七輪に、あの海の扇とでも言ひたい純白な帆立貝の貝焼鍋、これは小さいのでせい／＼一人前である。で、暮し向きのいい家では、多勢の家族が一人づつ七輪を膝前に据ゑて食事をする。この晩春の夕飯は、なんとも言へない楽しくもまた賑々しいものである。しかし、これは贅澤と言へば贅澤である。また、さつぱりとして而も味の深いシヨツチルは、事實食を進める作用をもつてゐる。

またキリタンポといふものがある。飯をこねて大きなクシに蒲の穂みたいに丸めて、炭火で狐色に焼いたのを輪切りにして、鶏肉の貝焼に入れて食ふのである。これは秋田米のしかも新米の味と、北秋田の比内鶏のうまさとが、一つになつて醸し出す美味である。

漬物にしても、秋田の漬物は特にうまいやうな気がする。初めて秋田の土地に足を踏み入れた人は、先づその種類の多いのに眼を廻す。澤庵や茄子や胡瓜の鹽漬は擧げるまでもないが、冬まで取つて置く紫色の茄子のオク漬、柿をつぶして大根といつしよに漬けて甘味を出した柿漬、大根を鉋でぶち切りにして麴と鹽で漬けた鉋づけ、鼈甲のやうに透きとほる三年味噌の味噌づけ、それには心をくり抜いて菊の花と紫蘇を入れた姉こ漬といふ別種もある。さらに雄物川の鮭を米で漬けた鮭の鮭も、いはば一種の漬物であらう。その他いち／＼かぞへ立てたらきりがない。少し裕福な家では、四斗も五斗も入るやうな大桶に何本となく漬ける。

お茶うけはこの漬物である。それをガッコ茶と言つてゐる。ガッコとは漬物のことである。誰でも顔さへ見せれば、まづ一ぶくして行けと言つて、ガッコ茶を出す。そのガッコが何種類となく出る。

これでもわかるやうに、菓子や副食物の代用を、この數々の漬物が引きうけてゐるのである。農家などでは、殆ど漬物だけで飯をすます場合が多い。飯がうまいので、結構漬物だけですませもする。またそれだけに、青物も魚も缺乏する冬の用意に、澤山の漬物を用意するといふことになる。

冬季の缺乏にそなへての、魚や野菜の貯藏食糧は、永い時代の間に、おのづからそこにシヨツチルとか變つた漬物とかの、特殊なさまざまの食物を生み出した。

そしてそれらの風變りな食品の刺戟は、氣儘の出来る一部の人間の間に、「秋田人は口が贅つてゐる」と言はれるやうな現象を生み出しもした。

しかし、これはもと／＼、米作一本鎗でほかの作物にとほしい土地に於て、雪の深い冬季の缺乏にそなへる用意が、自然に生み出したものであつた。現にこの冬など、野菜の配給が冬中を通して三度か四度しかなかつたのに、どうにか凌いで來られたのは、この漬物が役立つてゐたからであつた。

糧食と備荒貯藏

石川理紀之助の食糧對策

草木谷の山小屋に只獨り住んで開墾を行つてゐた數年間、石川理紀之助は毎日一合の米を貯へた。天保の飢饉のとき日に一合の米を粥にして人を救つたといふ記録を讀んで思ひ立つたのである。その分だけ糧かを入れて、毎日一合だけ貯へた米は、三年足らずで一石になつた。理紀之助は次男の老之助を呼び寄せて、自分の死後に若し凶歲があつたら、これを施せと言つて、その米を渡した。以來本宅の方でもその貯米を實行するやうになつた。

理紀之助が生涯を通じて、最も熱心に説いたのは救荒策であつた。しかしそれは一時的

な凶作の對策ではなく、農村の恒久的な更生策としてのそれであつた。そしてそれは、具體的には、糧食をして米を節し蓄へて窮乏にそなへることであつた。

「日本人は糧食せざるべからず」と、理紀之助は言つた。決戰態勢下の今日、節米とか補正食糧とか糧飯とか言ふことが言はれてゐるが、平常時に於ても糧食しなければならぬものとした。

外米の輸入をあてにして、米ばかりを食はうとする傾向は、理紀之助にとつて眞に憂ふべき現象であつた。明治廿年代の米産高三千五百萬石は、米のみを主食とすることになれば當時の日本の人口の約半數の要求を満たすにすぎなかつた。しかも人口は年に四十萬内外を増加する。これでいつたい將來はどうなるか。足りなかつたら外國から輸入したらいいだらうと言ふものがあるが、以ての外である。他國の救ひをあてにしてはならない。外米輸入は國家の損失である。よろしく自給自足しなければならぬと、理紀之助は叫んだ。

備荒貯藏は、天氣がよくても傘を用意するやうなものである。天明の飢饉には、鍵繩ま

で食つたといふ慘狀を語つても、年へるに従つて、それは當時の人間が愚かであつたからだなど、笑つて、何等の用意をしなかつた結果、五十年後の天保の凶歲には同じやうな慘害を嘗めた。傘を用意しなかつたからである。火事を見てから駈け出しても遅い。凶作になつてから木の實や草根を採りに行つても、そんな年は草木がよく育たぬものである。平年に於て貯へなければならぬと、理紀之助は教へた。

秋田縣の状態は殊に憂ふべきものがあつた。明治中期に於ては、琉球、壹岐、對馬などは勿論、飛驒、陸中、肥後などでも米は三割程度の混食をしてゐるのに、秋田では、九割まで米を食つてゐる有様であつた。

そこで理紀之助は、慶應三年に二十三歳の若さで、居村山田に農業耕作會を組織したときから、終始糧食と備荒貯藏の研究普及につとめた。古老の言を聞き、自ら救荒食糧の研究を重ね、あらゆる機會をとらへて實行をうながした。

明治卅年の凶作には、五十四歳の老軀をひつさげ、十二人の門弟を率いて、救荒巡廻指導を行つた。官費で旅館に泊つてあるく講演旅行ではなかつた。荷車をひいて野越え山越え、寺や社に泊り、或は野宿して、數十箇村をめぐりあるいたのである。

理紀之助はその居村山田の更生指導にあつて粟、稗、大根、百合根、蕨粉、糝、麥、榲實、その他の草の根、木の實を、糧食に用ひさせた。

その研究のためには、糧食調理會を起した。毎月の會合の晝食には、必らず糧食を持ち寄ることにし、審査人がそれを先づ上等、中等、下等に分け、上等のものから一同少しづつ食ひ廻しに意見を交換し、下等とされたものは、更に研究の下次回に再提出させた。また時々一同村々の社寺集會所に巡廻して、人を集める。その場で糧食を煮炊きして、普及をはかつた。

一方備荒貯藏としては、備荒倉無盡會を起して、組合員の戸毎に備荒倉をつくり、雜穀、木の實、草根の類を貯へさせた。米はこれには貯へなかつた。米は永年の間には賣つたり貸したりして、備荒の目的を達しないことがあるからである。

晩年に及んで九升田部落の更生指導に乗り出したときには米食代用の夏馬鈴薯をづくらせた。何故なら、この村は夏が来ない先に米をさらしてしまふ。しかも、夏作がないので食ふものがない。部落民は日雇稼ぎに出かけ夕暮に歸つて来て、その日得た錢で米を買ひに歩くが、うまく手に入らないことがある。この悲惨を見た理紀之助は、自分で金を出して富農から米を買つてそれを讓つてやる一方、夏馬鈴薯を奨励した。

しかるに、田へも堆肥が碌に入つてゐない有様で、肥料が間に合はない。これには困つたが、よく氣をつけて見ると厩肥を堆肥場に運ぶときに随分落ちこぼれがある。その粉肥を集めて小便を加へて練り合せて、貯へさせ、それで馬鈴薯をつくらせた。翌大正二年の夏米價が高かつたが、その薯が百餘俵收穫があつたので、いつになく部落は豊かであつた。

「寝てゐて人を起すべからず」

を信條としてゐる理紀之助が、その部落の指導事務所を眼をさますのは、いつも眞夜中前の十一時であつた。日記の書入れと書信の整理の日課が済んで、午前一時になると所員が、

二時には學生が起き出す。所員たちは、二時になると、起床合圖の板木を打つて、それぞれ監督巡視に出かける。そのころには、部落の家々から藁を打つ槌の音がきこえて来る。この日課は、どんな吹雪の日でも缺かさず、行はれた。あるとき、夜行して見學にやつて来た一行が、未明に村に辿りつくと、すでに藁槌の音が賑やかにきこえてゐたので、一同すつかり感心して歸つて行つた。

増産の對策として、田地に堆肥を十分に入れることは、居村山田の更生指導のときに於ても、理紀之助の最も意を用ひたところであつた。また山田でもさうであつたが、この九升田でも、生活の窮迫に追はれて、肥料草を刈る時期の七月から八月にかけてさかんに日雇稼ぎに歩く爲めに、堆肥は反當り二十櫛が、その半分も入つてゐない。これでは地力が落ちるのみならず、十分な收穫をあげる見込みがない。これは直ちに改革する必要があつたが、しかし、無理をすれば糊口に窮する状態なので、理紀之助は村の三人の地主に頼んで、來年の收穫まで無利子で肥料資金を出して貰ひ、それを家々に貸して、その年二千四

百七十糎の堆肥をつくらせることに成功した。

理紀之助が馬鈴薯ばかり食つて一週間過したのは、草木谷の山小屋に冬籠りしてゐた時であつた。ひよつこり訪ねて来た大川村の小熊惣之助といふ若者と語らつて、小屋にあつた米を全部本宅の方にやつて、朝も晝も夜も薯ばかり食つた。三日目には力が抜け、藁仕事をしてゐると汗が出て根がつかなくなつた。しかし、たうとう一週間凌いだ。八日目の朝、ふと棚の上に茶殻が目についたので、洗つて鹽をつけて薯といつしよに食つてみたが、何とも云へないうまさであつた。

これは、五年前の明治十九年に庄内に旅したときに會つた仙人清左衛門を思ひ出してのことであつた。漁村金澤村の清左衛門は、漁師たちがその日暮して貯へのないのを憂へ、開墾を行つて凶作にそなへることを説いたが、一向聞き入れぬ者がないので、單身山に入り、岩穴を掘つて穴居しながら開墾して、そこで穫つた薯ばかり食つて生きてゐた。それで仙人と呼ばれてゐた。

清左衛門は薯を搗いて餅にして食つてゐた。それには太い木を輪切りにして、三つ四つの臼をつくり、同時にいろ／＼にして搗いて比較研究した。その結果、ふかした薯があまり熱くてもまた冷えてしまつても、ほろ／＼していけない。その中間のところを搗くと、粘りがあつて餅になることを知つたといふことであつた。

この清左衛門に會つてから、理紀之助の糧食奨励の信念はいよ／＼堅くなつたのであつた。

凶年の對策としては、雜穀、木の實、草根などの糧食のほかには、夏作の早づくりを、理紀之助はすすめた。夏馬鈴薯をはじめ、八日稗、稻黍、夏蕎麥などがそれであつた。

このうち、八日稗といふのは舊秋田郡七日市の人、長崎七左衛門の「老農置土産」といふ書に「天明の大飢饉に八日稗といふ早手稗をつくつて、命の助かつた者が多かつた」とあるのから見つけ出したものであつた。明治十七年種苗交換會の折に、鹿角郡に粟や稗の多いのを聞き知り、同郡毛馬内の老農中津山富右衛門にたづねたところ「當地には八日稗

とは言はず八月稗といふものがある」といつて、その種子を送つて來たが、それが八日稗であつた。出穂して八日目にもう收穫出來るといふのでその名があるのである。七月初旬にいち早く稔るので、雀の害を受けるが、わづか八日間の雀追ひはさまで困難ではなかつた。しかも、普通の稗は一升のうち、二三合しか食はれないが、これは粃糠共に食用になり、救荒作物として上々のものであつた。理紀之助は年々に種子を取つて諸方にわかち、徳島縣の美馬郡の洪水の折には數石送つた。

理紀之助が生涯を通じて研究調査した糧食材料は數百種に上り、それは擧げて「庵の手鍋」の手記のなかにある。

糧食もいいが、調理のために薪や柴の費えが多く手數がかゝつて不經濟だなどいふ者があるが、それは理紀之助に言はせれば、朝起きすれば油が費やされ、働けば衣類を損ずるといつて起きず働かざる如きものであつた。

私は國民座右銘の選出を望まれたとき、理紀之助の「寐てゐて人を起すべからず」この一句を示したが、こゝにもう一つ「日本人は糧食せざるべからず」の言葉を擧げて置いていいかと思ふ。

馬

「坊やの名前は——」

「お馬のうんこ」

「お父さんの名前は——」

「お馬のうんこ」

ふざけることを覚えはじめた日出夫は、このごろ二言目にはさう言ふ。

自家の野良仕事がいそがしくなるまで、正月からずつと私の家に働いてゐた娘が、ある日、日出夫を連れて外に出ると、雪の上に落ちてゐる馬糞を見て、不思議さうな顔で、これは何だと言つた。そしてなか／＼そこを動かうとしない。やうやくだまして歩き出したが、また馬糞を見つけると動かなくなつてしまふ。これには手古摺つたと、娘は言つた。純白な雪の上ところがつてゐるなま／＼しい青みがかつた馬糞は、東京の乾いた舗装道路しか知らない眼には、よほど印象深かつたと見える。それ以來、それがすつかり口癖になつてしまつたのである。

日出夫は、外に出ると決して馬糞を見逃さない。必ずその前に立ちどまつてしげ／＼と眺める。この間も、妻が停車場に出征の見送りに行つたら、大聲で「お馬のうんこ」と叫んで、みんなを笑はせたといふ。

それほどこの横手町の往來は馬糞が多いのである。三月の半ば過ぎになつて、雪が解けはじめると、道路は眞黒になる。しかしそれは、地べたがあらはれたのではない。まだ堅い氷の厚さが一尺もある。だからそれは、土ではなくてゴミである。しかも大部分は馬糞の堆積なのである。



これでも馬の多いことがわかる。冬の間、いかに馬糧の往來が頻繁であるかがわかる。

ちよつと本屋まで、子供の手をひいて行く間にも、二頭や三頭の馬車馬に出會はないことはない。東京では自動車と電車を眺めることが、

何より喜びであつた日出夫は、ここでは家の裏手を走る横黒線の汽車と、もう一つ馬を見るこ

とが楽しみになつた。町角を折れて馬の姿が消えるまで、根が生えたやうに立ちどまつてぢつと見送る。

家から二町ほどで鍛冶町に出る左角に、古屋といふ装蹄所がある。ここにはいつも頬冠りを

した親爺さんや戦闘帽の若者が、馬の爪を剪りに來てゐる。ズツクの前垂をかけた赭ら顔の主人が、馬の腹の下に片膝ついて屈んで、棒押しみたいにうん／＼と踏んばつて、篋みたいな刃物でぐい／＼と忙しく馬の爪を削つてゐる。作業場のうしろの厩にも、いつも爪を剪りに來た二三頭の馬が、そこに同居してゐる鶏に鼻息を吹きかけてゐる。

ここは縣境の山内村に通ずる路なので、山内路の名がある。脊梁山脈を越えて、岩手縣の黒澤尻に出る平和街道は、ここから起つてゐる。平和街道とは、この街道が通過するこの平鹿郡と、岩手縣の和賀郡との郡名を取つた名であるが、大正十二年ごろ横手と黒澤尻を結ぶ横黒線が開通するまでは、秋田からする仙臺や東京方面への旅は、たいていこの街道を歩くか馬の背で通つたものであつた。當時この装蹄屋とその向ひ合せの家とは旅籠屋で、岩手縣の方から來る人々の定宿であつた。定めし南部の博勞たちも、ひんぱんにやつて來たことであらう。

横手の舊士族町と商家町とを分けて西北に流れる旭川の蛇の崎と言へば、送り盆の花火

で知られてゐるが、その橋の下手の川原をベコ川原と言つてゐる。ベコとは牛のことである。そこには畜産組合が所在して、牛市も立つには立つが、馬市で賑はう場所であるのに、さういふ名があるのには、何か曰くがあるのかも知れない。

稻揚げも濟んで木枯の吹きはじめになると、町は馬市で賑はふ。近郷近在から毛並のつや／＼した悪戯盛りの二歳駒が、ぴん／＼と跳ね返りながら、續々とやつて来る。どの馬にも、三人も四人も家族が付き添つてゐる。三里も四里もあるところから、女たちまで、馬の好物のクヅ（葛）の葉をゆさ／＼と負つて、せつせと馬と歩調を合せてやつて来る。

奥行が十里もあると言はれる大村の山内村の奥からも、澤山にやつて来る。横手の山内路の家々が、まだ戸をあけるかあけないかの朝まだき、ばか／＼と爽やかな蹄の音を響かせて、次々とやつて来る。まだ眞暗い二時ごろ起き出して出かけて来るのである。

この山内の奥は、今でも濕田である。あつちに二枚こつちに三枚と、山峽のわづかなところ飛んでゐる田なので、一たん水を落とすと、かけ水がおいそれとあたたまらない。たださへ冷害で青立ちになり勝ちだからである。

泥田では餘り馬をつかふことがないから、春には山内から横手盆地に馬耕に出かけて来る。馬も人手も不足なこのごろ、それで随分いい稼ぎをする者があるといふ。また反對に、盆地の農家から馬を曳いて行つて、草を踏ませる家もある。平野では馬に踏ませるほどの草は無いが、山間部では豊富である。馬に草を踏ませて良い堆肥をつくつて少しでも餘計に田に入れることは、山間部の冷田では、冷害を避ける大切な方法である。草の少い盆地の方では、飼料にも困るから、馬耕が濟んだあと、その馬を山間部の農家にあづけるといふことになるのである。

飼料にはどこでも苦心してゐるらしい。うんと骨をつかふ馬耕時には、大豆でも充分食はせなければ馬は痩せてしまふが、味噌豆にも不足してゐるこのごろ、思ふにまかせない。それに鹽氣も充分にはやれない。で、何町歩もつくつてゐる大百姓の中には、馬の力の及

ばないところを、自分で手打ちでやり上げるといふ百姓さへある。

しかし、その不足のなかでも、みんなせつせと馬を飼つてゐる。平鹿郡の五十戸ほどのある部落で、どのくらゐの馬がゐるかとはたづねたら、なんと四十數頭、馬のゐない家は、三戸か四戸しかないと聞かされて、軍馬の徴發で農村の馬が少くなつたやうに思つてゐた私は、なんとも言へない心強さをおぼえた。馬の育成地と言はれる同じ秋田縣のうちでも農馬の多い村と、すくない村とがある。これはその多い方の村であるかも知れないが、しかし一體に想つたよりも馬は多いやうである。

田舎に腰を据ゑるやうになつた昨年の秋からこの春にかけて、私が時たま訪ねたあちこちの村の、どこの家にも馬はゐた。それはいづれも働手を戦線に出してゐる家であつた。中には二人も三人も出征中の家もあつた。それらの勇士たちは、軍歌に送られて村を出るまで、朝夕に馬に草をやり、馬と共に耕作に汗を流した人々であつた。それらの人々が行つたあと、馴れない家族では、ことに手不足の時ではあり、充分に馬に手のとどきかねることもあるのだ。かゆいところにまで氣をくぼり、耕作のあとには、泥と汗だらけの體を洗つてくれた戦線の主人であつてみれば、馬といへども日々遠く想ひを馳せ、その武運を祈らずにはゐられないだらう。銃後の田地を守つて黙々と耕作にいそしんでゐるそれらの馬どもを、私は心なしに見過すことが出来なかつた。

田打のころになると、若草萌える野良のいたるところ、人と馬とが一組になつて汗を流して動き廻つてゐる。空は青く晴れ、村々は梨や李の花にかざられ、畦草には胡蝶がうつら／＼と舞つてゐるが、人と馬とはびつたりと呼吸を合せ犁を曳いて、終日息を切り汗をしぼりつづけてゐるのである。馬が疲れば、人は馬を休ませ、食はせ飲ませ、自らは畦に腰をおろして息を入れる。夢みるやうな花の野と思つたのも東の間、見渡すかぎり人馬一體の汗みづくの耕作の野良であつた。

馬耕だけではない。山からの薪炭の運搬に、供出米の積出しに、奥山からの航空機用木材の搬出に、あらゆる部面に馬は活動してゐる。ことに自動車の利かない雪國の冬の物資

の運搬は、すべて馬の背にかかつてゐる。雪消時の路上の眞黒なゴミが、すべて馬糞の堆積であるのもむべなるかなである。

野良のあちこちに、朝鮮牛や改良和牛が、虱が這ふやうにのろ／＼と動いてゐるのを見かける。これも小まめによく働く。しかし、その数は昨今でも左まで多くはない。なんと言つても、馬ほどの働きはないし、厩肥も餘計出ない。馬耕に代掻に、客土の土運びに、暗渠の土管運びにと、農用に於ては勿論のこと、薪炭木材から石炭鑛石の運搬にと、あらゆる人手に餘る重労働に、鹽辛い汗を絞りつづけてゐるのは、依然として馬なのである。馬の姿を見かけることの多いにつけて、銃後の農村に於ける馬の働きの大なることをしみ／＼想はずにはゐられないのである。

ぬかるみ時

横手に住んでみて、雨の多いのに驚いてゐる。この夏は早魃であつたので、特別なのかも知れないが、殆ど一日として雨が降らないといふ日はない。朝のうちは陽がさす日もある。雨の日は仕事に氣乗りがしない性分の私は、珍らしくいゝ天氣だなど、日影を見て喜んで飛び起きるが、飯を食つて机に向ふと、もういつの間にか曇つてゐて、やがてざあつと降り出すといふ具合である。

その癖、夜はたいてい拭つたやうな星空である。それが朝になると崩れる。時に晝近くまで天氣が持ち越すこともあるが、晝ごろになると曇る。西の方から薄々と曇つて來て、

午後になると冷い時雨が降り出す。これが晩秋から冬にかけての、この邊の決つた天氣の型であるらしい。

十月の三日に、私たち一家は東京を引き拂つて横手にやつて來たが、ちやうど收穫の最中であつた。氣持のいゝ秋晴れが四五日つづいた。あと數日この天氣がもつて呉れたら、すつかり濟むのだがと、私は人手不足を押し切つて稻揚げに懸命な人々の姿を、感謝の氣持で眺めてゐたが、夕方から降り出した雨は、そのまま何日も上らなかつた。そのために稻揚げは随分遅れた。

十月の半をすぎてから、やうやく天氣が直つて、見渡すかぎりの田圃から、穂塙がすつかり姿を消したが、それから再び天氣が崩れてからは、もう來る日も來る日も時雨れて、二日と日和がつづいたことはなかつた。

冬の寒さと、秋から冬にかけての悪天候は充分覺悟して來たつもりであつたが、さて來てみると、それは想像以上であつた。

種苗交換會の第二日目の日は、からりと晴れて、眞白な鳥海山が見えてゐたので、私は足どりも軽く家を出たが、汽車が刈和野あたりにかかつたころ、もう曇天になつてゐて、秋田驛に降りると、雨が降り出してゐた。それが、圖書館に寄つてゐるうちに土砂降りになり、交換會の會場へ行つてからもつひに霽れ間がなく、私はどろどろの路をびしょ濡れになつて歸つた。ふと見ると、ぞろぞろと停車場に向ふ郡部の人たちの多くは傘を持つてゐる。思へば、種苗交換會と雨とは付き物なのであつた。

この前秋田市へ行つたときも、私は同じ失敗をしてゐた。まだ十月末ではあつたし、天氣もよかつたから、開襟シャツに背廣の輕裝で、雨外套ももたずに汽車に乗つたが、大曲あたりから空は曇つて寒くなつて來た。汽車が進むにしたがつて、寒さは加はる一方で私はふる／＼ふるへはじめた。

ふと見ると、卷脚絆に雨外套、それに毛系の手袋までした人が、すぐ私の前に立つてゐた。はじめは、少し氣早な冬支度だなど見てゐた私は、やがてさういふ自分の方が、時候

はづれの恰好であることに気がついた。さう気がついて車内を見廻すと、手袋こそ少いが、みんな冬支度の姿なのである。私は自分の見當ちがひにあきれると同時に、突つ放されたやうな心細い氣分に襲はれた。二十年の東京生活は、私の體だけではなく、意識までも、いつかしら故郷から遠く引き離してしまつてゐたのである。

晩秋から初冬にかけては、晴雨にかゝはらず、つねに降られる用意をして歩かなければならない。たつたそれだけのことさへ、歸郷して三ヶ月近くになる今日このごろ、やうやくわかつたといふ有様である。二十年前の自分をすつかり取りもどすまでには、まだ當分の間があると思はなければならぬ。

まだ私は、天氣のわるいのにあきれたり氣を腐らしたりしてゐるが、故郷の人々は何のこたはりもなく、しつくりと天候に順應してゐる。女たちさへ、どんなに路がわるくても、ゴム長靴でさつさと歩き、雪が降れば毛布をかぶつてどん／＼押し歩いてゐる。

私の義妹なども、雨にも雪にも一向めげない方で、この間の婦人奉仕週間にも、毎日び

しよ／＼と降りつづける冷い雨のなかを臆劫さうな顔もせず、毎日歩き廻りつづけてゐた。慰問狀の發送、神社參拜、授産場視察、最後の日には一里もある野の中の防空監視所まで、土砂降りの雲のなかを、子供をおぶつて、隣家へ行くやうな氣輕さで、さつさと行つて來た。

富山の薬賣り

一年中で、いちばん雪の深い正月末のある日、富山の薬賣りがやつて来た。

産後で隣の部屋に寝てゐる妻が、どなたですかと聲をかけたが、それが聞えなかつたのか、ちら／＼雪の降つてゐる外から、のつそり戸口に入つて来た薬屋は、無言のまま上り框に背中の梱をおろして、のこ／＼と上りこんで来た。そして、そのストーブのそばにゐる私を見つけると、上り框にべたりと平蜘蛛のやうに身を伏せてお辭儀した。

たださへ穴ぐらのやうに暗い家の中は、殊に雪で明るい戸外から入つて来ると、しばらくは眞暗で何も見分けがつかないので、私は相手が初めて私の存在に気がついて、あはててお辭儀したのかと思つたが、實はこれは、毎年やつて来て懇意になつてゐる家での、きまりきつたやり方であるらしかつた。

「歌ちゃんがゐないので、今ちよつと、わからないんだけど——」

隣の部屋から妻が言つた。家の主婦である歌は、ちやうど使ひに出てゐた。當座の同居人である私たちは應待にまごつた。

「赤い箱に入つてゐますがな、なかに、おわかりにならなければ、後で結構ですよ」

炭坑ズボン姿の小柄な頭の禿げかかつた薬屋は、至極あつさりとさう言ひながら、ゆつくり胴亂の煙管を抜いて、一ぷくつけた。

私は歌の娘のれい子に言ひつけて、その赤い箱を探させた。箱はすぐに見つかつた。

「旭村の方にお出でになる時分から、ずつとお願ひしてゐるんですよ」

やがて私がこの主人ではないことに気がついたらしい相手は、自分とこの家との關係をそんな風に説明した。歌の良人は學校の教員で晝間は家にゐないので、薬屋は顔をよく

おぼえてゐないかも知れなかつた。歌たちは、もう六七年前に、この町のすぐ西の方のその村にゐた。そんな時分から懇意な間柄であるとわかつてみれば、一見無遠慮なやうな先刻の態度も不自然ではなかつた。

薬屋は上り框に置いてある紺の風呂敷包の梱を抱へて、ストーブの前の座布團に戻つて來た。きちんと膝を折つて、梱を左わきに置き上體だけねぢ向けて、上に行き次第に一周りだけ小さく出來てゐるその五つ重ねの、隅々の摺り切れてゐる柳梱をあけて、ボール紙の裁縫板みたいな二つ折の四角な板を膝前にひろげ、その上で赤い箱の中の配置賣薬の整理を始めた。

その中には、この薬屋の置いて行つた薬以外のものも入つてゐた。そこで薬屋は、先づそれを撰り分けて一まとめにして傍らに置き、自分の置いて行つた分は、頓服、胃腸薬、熱さまし、婦人薬と分類して、例のボール紙の板の上にきちんと置いた。

その家庭薬と大きな字で表に書いてある赤い箱の抽出の後ろには、去年置いて行つた薬の種類とその數量を記した配置票が挿んである。

それを薬屋は取り出して、ボール紙の上に揃へた薬といち／＼照し合せ、足りなくなつてゐる分だけ、つまり使用された分だけを、受取證の紙片に書きこみ、名札ぐらゐの小さな算盤を梱の中から取り出して、膝の上でばち／＼と計算した。

「これだけお使いになつてゐます、これは四つ残つて居りますから三つ、これは二つ残つて居りますから三つ——」

「なるほど／＼」

残つてゐる薬袋を取り上げて、いち／＼説明するのを、私は別に檢分する氣もなかつた。うなづいた。合計五圓六十錢也であつた。それが、この家の一年間の富山の薬の消費量で、胃腸薬は全部使用されてゐた。

次で薬屋は梱の中から新しい薬をいろ／＼取り出して、一種類づつボール紙の板の上に並べ、すつかり揃つたところで、物馴れた手つきで、赤い箱のなかにきちんと詰めこみ、

新しく記入した配置票をその抽出に挿んで、その赤い箱を私の方に差し出した。

「このごろは薬品が無くなりましてね」

新しく箱に納めた薬のなかには、メンソレータムみたいなものが六つ、反魂丹が三つ、その他四つ五つの種類があつたが、去年置いて行つた薬よりは種類が少なかつた。

「毎日何軒ぐらゐ廻るもんですか」

「私でしたら、二十軒も廻ればいい方ですよ、三十年もやつて来て、すつかり馴染みが出来てしまふと、能率が上りませんでね」

三十年も秋田縣にやつて来てゐるといふ話も、決して誇張や嘘ではないことを物語つてゐるやうな、澁紙色に陽に焼けた顔色であつた。

普通に考へれば、何十年となくやつて来て確實なお得意が出来れば、それだけ能率が上るやうに思はれるが、實際はそれは逆なのである。三十年も通ひつづけて親類みたいになつてしまふと、茶飲話も永くなり、おいそれとは腰が上げられない。駈け出しの馴染みの

薄い薬賣りが、日に五十軒も六十軒も廻るのに反して、古顔になればなるほど、二十軒廻るのにも苦勞することになる。それだけ旅籠錢が餘計かかることにもなる。

なるほどと私はうなづいたが、ここにこそ富山の薬が元祿時代から今日に至るまで全国津々浦々に根を張りひろげて来た理由があるし、そんな永い時代にわたつて農山漁村の醫者代りをつとめて来た根據もあるのだとつくづく思はずにはゐられなかつた。

その永い歴史をもつ富山の薬も、この戦争によつて、曾てなかつた大きな變革を見ることになつたといふ。澤山ある富山縣の會社は、廣貫堂一つに統合される。大阪や滋賀縣の配置賣薬も、同様にそれぞれ統合される。そして、整備統合された會社によつて、それぞれに賣薬配置の區域が制限されるが、富山の薬は秋田縣では、平鹿、山本、南秋、河邊の四郡といふことになるらしい。行商人も、就業出来るのは、従來からの專業者で且つ四十歳以上の者に限られ、その行商區域は、これまでは同じ會社の賣子が繩張りを冒し合ふことが出来ないといふほか勝手次第であつたものが、一定の小範圍に限られることになる。

薬の種類や數量も減つて、部落常會にまとめて置いて、そこで必要に應じて各戸に分配してもらふといふ風なことになるらしいといふ。

しかしこれは、戦争によつて一層早められたといふだけのことで、富山の薬の當然受けなければならぬ變革であつた。醫藥や醫術の進歩普及、健康保險や醫療利用組合の出現によつて、それは急速に昔日の俵を失ひつつあつたのである。

二杯目のお茶を飲み終つた薬屋は、再び紺木綿の大風呂敷でしつかりと梱を背負つて、そぼ降る雪の中に出て行つた。

私は何故か富山の薬賣りといふものの最後の姿を見送つたやうな氣がして、戸口の雪明りの方に、いつまでも顔をもたげてゐた。

吹雪を聽きつつ

——郷土に歸住して

正月の四日にやうやく妻の妹の隣の借家が空いて、私は初めて田舎に腰が落着いた氣持になつた。それまで三ヶ月餘り、私等は妻の妹の家に同居して來たのである。

平鹿郡横手町の町端れの田圃中のこの小家は、もう半ば雪にうづもれてゐる。しかも雪はまだ降り始めである。二月の末にもなれば雪は殆んど軒の高さになり、玄關に入るのに穴の底へ潜るやうに、坂になつた雪を踏み降りなければならぬ。

今年は根雪が遅れて、十二月の廿五日からやうやく本降りになつたが、それからはのべつ幕なしに降り續いて、僅か十日餘りで、どここの家でも屋根の雪降しを始めた。



吹雪を聴きつゝ

私も正月早々に、娘と二人で雪降しをした。冬籠りの支度は、子供の時分の記憶を引き出して考へてゐた以上であつた。雪圍、薪、藁蒲團、ゴム靴、雪篋、藁靴、雪下駄、俵靴、とかぞへ上げると、まだまだある。間もなくお産があるので、赤坊の保温のために必要な嬰詰えづめも用意した。そんなものが一つ二つとふえるに従つて、私等は次第に田舎暮しに馴染んで來た。

子供たちが寝しづまつた夜半、ストーブのそばにもんぺの膝を折つて、怒濤のやうな吹雪の唸りを聴いてゐると、しみじみと田舎に歸つて來たなと思ふ。田舎暮しをするに當つて、この横手を選

んだのは、自分の生れた土地（こゝから雄物川を二十里ばかり下つた）には、家は勿論、身内もゐないのに反して、こゝには家族同様に私等を迎へてくれる妻の妹がゐるからであつた。

空襲の必須と都會人口疎散の聲は、すでに私の耳にも痛く響いてゐた。想へば農村への關心に始終してゐる自分にとつて、都會居住は有意義なものではなかつた。家族の保健上からいつても田舎暮しの方がよかつた。都會生活といふものが、急に無意味に思はれて來た。それは、作家としての自分の内面に、農村生活を再吟味する必要が起きて來てゐる爲めでもあつた。その中に腰を据ゑて、とつくりと農村を見たい欲求が頭をもたげて來てゐたからでもあつた。

都合のいゝことには妹の家の隣家が十二月一杯で空くといふことだつたので、私の決心はついたが、餘り突然な話でもあつたので、妻の氣持は動搖してゐた。

やがて田舎の妹から、隣家の引越が延びるらしいといふ便りが來ると、私の決心までが

ぐらつき始めた。十年以上住み馴れた代々木西原の土地への妻の愛着や、田舎暮らしに馴染みのない娘の氣持や、それからそれと考へると私の決心も鈍りがちであつた。しかし、所詮は作家として田舎に腰を据ゑないでは濟まされない自分であつた。それには、疎開の要求され始めてゐる今決行するに越したことはない。善は急げ、私はそれが延期することよりも延期したゝめに未遂に終つてしまふことを恐れた。私は決行することにした。

といふのは、妹の良人は、私等が夏に出かけて行つた少し前に、教育要員として南方への壯途についてゐて、娘と二人暮しの妹は、私等が隣家に住むことを喜んでゐたし、隣家が越して行くまで少しの間、同居させても呉れるのであつた。

私にせき立てられると妻もすつかりその氣になつて、あたふたと支度にかゝつた。その日暮しの家財道具しか何もない身輕さが、わづか四五日のどさくさで、私等一家を田舎に運んでくれた。

三十個足らずの荷物だが、田圃中の妹の小さい家は一杯になり、その足の踏場もないやうな中で、同居生活が始つた。何よりも心配してゐた娘の轉校も、學校の好意でうまく行つて、つい昨日まで電車で通學してゐた東京の女學生は、ゴム長靴に猫げら（背負子）をして稻揚げの勤勞奉仕に田圃路を勇んで行くやうになつた。

田舎に来てみて、何よりも身にしみて嬉しいのは、土地の人々の親切である。渡り者の寄合である都會と異つて、そこにゐるのは、その土地に生れ、その土地を拓き守つてゐる人々である。流れ者を容易に容れようとしなのが、田舎の昔からの性格であつた。

都會の移住者は、この土地の血肉である人々に對して、その山川草木に對するやうに敬恭でなければならぬと同時に、田舎の人々にもまた新しい性格が要求されるだらう。疎開は都會人と地方人とがしつかり手をつなぐ惠まれた機會でもある。

ウメヨ

冬の間、ずっと家で働いて貰ったウメヨが、春蒔きの大豆と南瓜の種と、子供への土産の霰餅を持つてやつて来た。

「雪で山さ行かれなくつてよ」

田圃路を二里歩き、それから汽車で二十分、さらに十町も歩いて来たウメヨは、崩れるやうにべつたり坐つてほつと一息ついてから、血色のいい頬をもたげて言つた。

すつかり春になつたと思つてゐると、昨日また雪が降つた。午後から天気が崩れて雨が降り出したが、それが見る見る雲になり霰になり、一時間もしないうちに吹雪になつて、

また冬がぶり返した。夜中も降つて朝は三寸も雪がつもつてゐた。ウメヨは毎日親たちといつしよに、山に薪採りに行つてゐたが、今日は雪で行けなくなつたので、かねて私のたのんで置つた畑物の種を持つて来てくれたのである。

私はもう十日も前から裏の畑を掘り始めてゐた。町の道路は大方乾いて、子供らがコマを廻して遊んでゐるといふのに、畑の雪はなか／＼消えない。それで私は、勝手口の雪のなかに堆くなつてゐる塵芥を運んでばら撒いて、消雪を早めた。裏には大きな枝垂柳があるが、それが連日の北風にゆすられて千切れた細枝を、畑の残雪の上に、いつばいに落してゐる。廣い畑に全部撒くだけの塵芥がないので、半分でやめたが、二階から見ると、ただ處々汚れて見えるだけの僅かの塵芥でも、なるほど他の半分よりは、たしかに一日か二日消雪が早かつた。

雪が消えた尻から、私は毎朝三畝か四畝づつ掘つて行つたが、さて種は、といふことになつて、ウメヨに頼むことにした。町の種子屋でも種を賣りはじめてゐるが、私は何故か

ウメヨ

二二九

さういふ店の種を買ふ氣がしなかつた。やはりこの邊の百姓の畑から採つた種にしたかつた。それにはウメヨに頼むのが、いちばん手近であつた。

ウメヨが私のところから暇をとつて家に歸つて行つたのは、五日前の四月十日であつた。ウメヨは、私の妻の妹の歌が縁づいた家に入りして、その畑をつくつてゐる久次郎の娘である。この正月の三日に、私は吹雪を衝いて、歌のその家の法事に行つたが、そのとき久次郎も来てゐたし、ウメヨも臺所の手傳ひに来てゐた。

歌のはからひで、私はそのとき、ウメヨを冬の間家の手傳ひをして貰ふ約束をして來た。少し前に東京の方の奉公先から暇をとつて歸つて來てゐるウメヨは、春になつて百姓仕事がいそがしくなるまで、冬のうちは遊んでゐるやうなもので、行つてもいゝと言ふのであつた。私の一家は、十月に東京から疎開して來て、初めての冬越しに慣れないのと、正月に子供が出来る豫定になつてゐるので、どうしても人手が欲しかつた。ちやうど願つたり叶つたりであつた。

法事から一週間ばかりたつてから、ウメヨは小さい柳柵を背負つて、私たちの家にやつて來た。私たちの家といふより、義妹の歌の家といふ方が正確である。歌の良人が南方に行つてゐるのを幸に、私たちは歌の家に同居させてもらひ、そのままずる／＼に、三月の二十日に今の大きい家に越すまで厄介になつてゐたのである。といふのは、私たちは歌の家の隣が空くのを眼あてに、急に東京を引き上げてやつて來たのだが、その月いつばいに空くはずの隣家が、なか／＼空かない。隣家が越して行くはずの家に住んでゐる人が、今にも腰を上げさうにしながら、いつまでも動かないためであつた。

町はづれの田圃中の小さい家は、娘と二人きりの歌たちを押しつけて、私たち一家が占領した形になつてしまつた。人と荷物で、狭い家の中はいつばいになつて、足の踏場もない。

田圃中なので殊更雪が深く、ウメヨが來る少し前から根雪になり始めた雪は、どん／＼つもつて、日ならずして窓をうづめてしまつた。窓のいちばん上の硝子から天氣のいい日

には、わづかに漏れてゐた陽かげさへもささなくなつて、家の中は、人の顔がやつとわかるといふほどの薄暗さで、全く文字通りの穴ぐら暮しである。

その穴ぐらのなかに家族は六人、それにお客はあるし、鶏も三羽ゐる。その上にお産があつたし、雪が降る前まで、オシッコをおしへてゐた日出夫は垂れるやうになつた。もう晝も夜も上を下への騒ぎである。

ウメヨはよく働いた。朝はまだ外も薄暗いうちから起きて、飯の支度をし、二人の女學生を學校に出し、日ねもす臺所に立ち通して、ストーブに手をあたためる暇もなく働いた。鶏の三度の餌も忘れなかつた。野菜の配給が月に三度とは無いので、芋の皮も人參の尻尾も出なくなり、餌はやがて二度になり、時に一度しかやれない日もあつた。ウメヨは鶏に食はせるのに苦心して、せつせと臺所の屑物を俎板で刻んだ。

父親の久次郎は五尺足らずの小男であつたが、ウメヨもその父親より大きくはなかつた。年は二十四であるが、小柄なので一寸眼には十七八ぐらゐるにしか見えなかつた。棚から物を降ろしたり、電燈のネジをひねつたりするときには、手が届かず、人にやつてもらふことがあつた。

ただ困ることが一つあつた。誰に對しても對等の言葉しかつかはないことであつた。私にもお前と言つた。歌をつかまへて、歌ちゃんと言つた。歌はその村で學校の先生をしたことがあつて、ウメヨにも一年間だけだが教へた。ウメヨにとつては、歌は出入りの家の嫁さんであると同時に、先生でもあつた。それに對して、お前と言ひ、歌ちゃんと呼ぶのであつた。すべてその式で、言葉づかひが餘りに粗野なので、他人のゐないときには何も無いが、人前では閉口することがあつた。

それと同時に、その言葉には強い他國の訛りがあつた。この邊の純粹な言葉でもなければ、標準語でもない。變な粗野な訛りがあつた。

やがてそれは、愛知縣のどこかの田舎の言葉らしいことが分つた。といふよりも、その愛知縣の田舎の機織はたをり工場の言葉であるらしかつた。

ウメヨは最近、東京の方に一年ほど奉公して歸つて來たのであつたが、その前愛知縣の工場に六年ほど年期奉公したのであつた。さうと知つて、私はなるほど、初めてウメヨの言葉づかひを合點した。滅多に休日もなく、毎日暗いから暗いまで働きつづける工場では、ほかの社會に觸れる機會がない。言葉を交すのは、工場の仲間だけである。そこでは對等の言葉づかひしか必要がないのである。この邊の田舎でも、敬語などいふものは殆んどつかはない。ウメヨの場合は、この二つが一緒になつてゐるのである。

機械工場に年期奉公したと聞いてから、私は何となく昔からウメヨを知つてゐたやうな氣がして來た。私はずつと前に、秋田から年期奉公に行つて働いてゐる少女たちをある小説に書いたことがあるが、その小説のなかの少女の一人のやうな氣がして仕様がなかつた。事變前の農村の不況な時分、秋田地方の農村から、さかんに娘たちが、愛知縣や靜岡縣の機業地の小工場に、年期奉公に行つたものであつた。打ちつづく不況に加ふるに、昭和六年と九年の冷害凶作の打撃にひしがれた百姓たちは、百圓か百五十圓ぐらゐの前借金の

身代りとして五年六年といふ長期の年期奉公に、娘を周旋屋の手に渡したのである。工場としては、月に二圓か三圓の小使錢を呉れるだけで、五六年にわたつて朝から晩まで牛馬のやうにコキ使ふことが出来る。資本もなく、大工場と競争するその地方の無数の小工場にとつては、わづかの前借金の餌で釣れる凶作地の娘たちが是非とも必要であつた。それだから、その地方には、秋田の貧農の娘たちが何千人となく行つてゐた。ウメヨもそのなかの一人であつた。それが戦争による平和産業の閉鎖で、村に歸つて來たのであつた。

ウメヨは非常に親想ひな娘であつた。家に來た初めの數日間、自家に歸りたがつて泣いてゐたらしかつた。わづか五里しか離れてゐない私の家でさへさうとすれば、遠く年期奉公してゐた時分は尙更であつたらう。私の家に來てゐるうち、二度ほど途中用事で家に行つたが、そんなときウメヨは、喜びを包みきれない顔つきで、いそ／＼として出かけて行くのであつた。

さういふウメヨの姿を見る度に、小さいころから一家を助けて働きに働きぬいて來たこ

の娘を、私は無性にいじらしく思はずにはゐられなかつた。

四月の八日にストーブを取りはらつたが、寒い間だけといふ約束のウメヨは、その翌々日に、梱を背負つて暇をとつて行つた。そろ／＼種蒔きで生家がいそがしくなるからであつた。

雪降し

正月の七日に、女學校二年の娘と二人で、屋根の雪降しをやつた。子供の頃は何度もやつたが、今度東京を引き上げて歸郷して初めて、實に二十何年ぶりである。

今年は雪が遅くて十二月の二十五日にやうやく根雪になつたが、正月の四、五日になると、もうどこでも雪降しをしてゐる。毎日毎日降り續いて、忽ち家々の屋根は厚い薄團をかぶつたやうな雪である。ひどい家は三尺もつもつて、今にも家が押しつぶされさうに見える。一茶に「初雪や降れば忽ち三四尺」といふ句があるが、その通りである。信州の戸隠山近くの山奥と、この奥羽山脈を背負つた横手とは、雪の深い點で、大した違ひがない

らしい。

私の生まれ故郷は、こゝから雄物川をずっと下つた秋田市であるが、ここほど雪は深くない。いちばんの證據には、私は子供の時分一冬に二度も雪を降したといふ記憶を持つてゐない。私の家はたゞさへ今にも潰れさうな古家だつたので、大寒のころになると、雪の重みで、みし／＼といふ音がして二つさりの室の真中の襖が動かなくなる。もう一押し重みがかゝれば、つぶれてしまはないともかぎらないのである。それでも、いつの年も一冬に一度しか雪降しをしなかつた。

それがこゝでは、本當に降り出してから僅か十日餘りで、もうどこの家でも危険を感じるほどの雪なのである。

砂糖のやうにさら／＼とした雪は、まだ柔くて軽い。私はシャベルで、娘は雪篋で、どんどん投げける。

下で見てゐると、小さい家の屋根ぐらゐ、すぐ出来るやうな氣がするが、屋根の上へ上つて見ると、その雪の多いのに驚く。これはなか／＼大變だなと思ふ。切つても切つても雪は盡さない。

そのうちに空が一層暗くなつて、吹雪いて来る。それが、屋根の雪を吹き飛ばすのといつしよになつて、全身に吹きつける寒さは特別である。下よりも風當りが強いからである。近くの山々も、もう姿を消してしまつた。どつちを向いてもたゞ乳色の一色である。吹雪の威力で、一切のものが活動をやめたやうに、路行く人の姿も見えない。

うををんといふラッセルの警笛が、その死んだやうな静寂を破つた。近くの横黒線の鐵路を除雪するラッセルである。

汽車のそれとちがつて、腹底に滲みるやうなラッセルの警笛は、いかにも雪の深いことを想はせる。

雪が空を暗くしてどん／＼降りしきると、決まつてラッセルの唸りが聞える。雪が線路を深くうづめると、汽車が動けなくなるので、どん／＼降り積りはじめるとラッセルが出

動するのである。

しかも雪は毎日のやうに降る。ちよいちよい霽れ間があるが、永くは續かない。毎日朝から晩まで降る。したがつて、ラッセルは毎日のやうに出動する。一日に二度も三度も出ることもある。

脊梁山脈を秋田縣の平鹿郡から岩手縣の和賀郡へと越える横黒線は、日本でも最も積雪量の多いところである。その積雪と戦つて列車やラッセルを運轉する乗務員が、ひどく難儀するだけでなく、その人力による除雪が大變である。一夜に二尺も三尺も降り積る雪をシヤベルや雪篋で拂ひのける仕事は並大抵のものではない。

一月二月三月と、一年中で最も雪の多い時分には、線路のいたるところに、熊のやうに着ぶくれた人々が、吹雪の中でせつせと除雪にしたがつてゐるのが見られる。切り投げられた雪は、次第に線路の兩側に積み上げられて、列車の屋根よりも高くなる。何のことはない、列車は雪のトンネルの中を通るやうなものである。



雪降し

米 出 供

しかし、今日は男手が足りない。村に残つてゐる人々は、米の供出にいそがしい。そこで輸送増強に協力するために、村々から繰り出される除雪挺身隊には、國民學校を出たばかりのうら若い少女が多い。

犬の毛皮を着た男たちに混つて、多數の少女たちが、寒さに頬を眞赤にしながら、終日吹雪と戦つてゐるのである。

屋根の雪降しはたうとう夕方までかゝつてしまつた。寒さは一層厳しくなり、雪は硬くなつて來た。吹雪はいよゝゝ加はるばかりだ。しかし、鐵道の除雪に挺身してゐる少女たちの連日

の勞苦を想へば、これしきのことばものゝ數ではなかつた。

寒い／＼と云ひながら、私も娘もたうとう物置の屋根の雪まで、すつかり降してしまつた。

落 磐

近くの吉乃鑛山にゐる知人に、いろいろ鑛山の近況も聞きたいし、暇を見て是非話に來て呉れといつてやつたが、多忙で行かれないといふ返事が來た。

私の知人は、索道の係員で、朝に人夫たちのコマ割りをし、修繕箇所を見廻るといふ位の仕事である。それに、私の今住んでゐる町までは乗合自動車と汽車と併せて一時間と僅かしかかからないのだから、たまに誰かに代つてもらつて、山を下りて來られないことはないだらうと私は勝手に考へてゐた。

それがもう雪が來て、身を切るやうな木枯が吹き荒んでゐる山の上の番所に、朝から夜

まで詰めかけて、一日も休むことは出来ないといふのである。

私はその葉書から、一塊の鑛石でも多く出さうと勵んでゐる鑛山の息吹きを、直かに聞くやうな気がした。

その銅山を私がたづねたのは、この夏であつた。數年前にも一度足を入れたことがあつたが、その時分のひっそりした様子にくらべて、道路は廣くなり、選鑛場は大きくなり、索道の籠はひつきりなしに頭上を走り、カンテラを下げた坑夫たちの往來は繁く、精煉所こそ無いが、今や一かどの鑛山に姿を變へてゐた。

作業服に鐵兜、カンテラを下げて、現場員に導かれ坑内に入つた私は、坑口から一町ほど入つた見張のすぐ前に、落磐があるのに、先づ度膽をぬかれた。

「忙しくつて片づけてゐる暇がないですよ」

落磐で山のやうに母岩が崩壊したかげから、化物みたいに、上半身裸の男たちが次々と飛び出して來た。仕事を終つて歸る坑夫たちが、豎坑の梯子を上つて來るのである。

大切坑をずつと奥に入つた切羽では、全裸の男が今油壺から飛び出して來たやうな汗だらけの恰好で、必死に鑿岩機を押して、發破穴を揉んでゐた。汗ぐつしよりの禪が、昆布みたいに腰にへばりついてゐる。

その暑さはお話にならなかつた。私の頭は忽ちぼうとし、流れこむ汗で眼は霞んで來た暑さといふより、耐へがたい重苦しきであつた。

聞けば、これは山が揉めてゐるためだといふ。母岩が上から上から押し來るその磐壓で、硫化鐵が不完全燃焼を起す、その熱なのだといふ。

私はさらに幾つかの切羽を廻つたが、それよりもつと暑いところがあつた。文字通り息がつまつた。ここで働いてゐる坑夫は、油壺どころか、眼も鼻もどこにあるのかわからないどろ／＼の揚げ物みたいだといつた。

切羽の入口には、さういふ風に揉めてゐる母岩の落磐を抑へるために、八寸丸太をがちりと組んだ留がしてある。その丸太がみんな、今にもぼきりと二つに折れんばかりに、

ぐつと撓んで、半分割れてささくれ立つてゐるのである。

今にもがら／＼と来るやうな氣がして、私はものの三分とは切羽に入つてゐられなかつたが、山を毀しても掘れ、掘つて掘つて掘りまくれといふ、南太平洋に於ける決戦の要請にしたがつて、坑夫たちは黙々として掘り進んでゐるのであつた。

紅蓮

「なあだあい、こうれえん」

生垣の眞白い小米の花が生あたたかい風にそよいで物憂い午後、さういふ眠たいやうな觸れ聲が近づいて来る。

その箱を背負つた婆さん呼び入れて、母はコウレンを買つて、私たちに二三枚づつ分けて呉れる。名題紅蓮といふのは、紙みたいに薄く切つた餅を焼いてふくらました短冊より一寸小型の細長いもので、よくふくらんだところは大きい泡みたいにぷく／＼ふくらんでゐる。かり／＼と齒ざわりはいいが、甘味も辛味もない單味が、子供心にも何か物足りないものであつた。

秋田市の長野下堀反に育つた私の子供の時分、多分一錢に三四枚だつたらうと思へるそれが、唯一のおやつであつた。キャラメルが子供らの齒を悪くする一寸前の時代である。子供の時分を考へると、奇妙にこのコウレンが一抹の哀愁をともなつて、私の胸に浮き上つて来る。なあだあい、こうれえん、と長くひつばつた婆さんの娘のやうな澄んだ聲が耳にきこえるやうである。

ついでこの間、秋田市の書店で、三浦匠三といふ人の「古今秋田英名録」といふ本を求めて来て、まんぜんと拾ひ読みしてゐると、思ひがけなく、その紅蓮尼の名が眼についた。紅蓮といふ尼さんの初めたものであることだけは、いつかどこからともなく聞いてゐたが、その傳記らしいものを見るのは初めてであつた。私は言ひやうのない懐かしさで讀んだ。

出羽國象瀉の商人の娘。その父西國三十三所の觀音を巡拜せんとし、獨り旅立ちたるに、陸奥國松島の掃部と同志道伴れとなり、いと懇ろに語り睦びながら巡拜を果し、白河の關にて別れんとせしに、互に名残を惜しみ、かく親しみ馴れたるに今遠く別れんには、又逢ふことも測り難し、君一人の男子ありと聞く、我も又一人の娘あり、願はくは二人を娶せて、永く好を結ばんと。掃部大に悦び松島に歸り、見ればその子小太郎病死して人々集り悲しみ合ふ處なり、子に先だたれし親の心、闇に迷ひて日を経る程に、象瀉には未だ斯くと知らざる中、程なく娘を送り来る。掃部大に驚き「我子早く身まかり侍りき、さるを疾く告げざりしは我の失策、面目なし、何卒、はかなき縁とあきらめ、疾く歸りて良夫に嫁せよ」と言ふ。然るに娘はいたく驚き「親々の互に許せし者は、いまだ對面せざるも妹背とこそ思ひ侍れ、宿世拙きはいかにせん、今より後は唯亡靈に事へ、命終るべし、他し心を持ちはんべらず」と、いかに勸むれども聽かず、つひに止りて舅姑に孝養を盡し、その實々しき事世に比類なし、斯くするうち歳經て、舅姑も身まかりければ、村里の少年の姿色に迷ひ挑み寄るを嫌ひ、飾をおろし、圓福寺の明極禪師の弟子となり名を紅蓮と改め、心月庵を營み一向に法道を修行す、又その手すさみに作りし

煎餅をひさぎ、わづかにその生を養ふ、この煎餅後には尾の名により紅蓮と唱へ、いまなほ松島及び秋田の名物となれり。

いかにも私の胸のうちにあるあの單味のコウレンにふさはしい物語である。時代は六百年前の北條高時のころとあるが、紅蓮の生地象瀉は、文化元年の鳥海山の噴火にともなふ大地震で地形がすっかり變つてしまふまで、松島と並び稱せられた景勝の地であつた。それ故に西行も杖をひいたと言はれ、芭蕉の雨に西施がの句もある。二つの名勝を結びつけたところに、つくり話らしい疑ひも起るが、またそれだけに、優美な趣きを餘計に感じさせられもする。文は續けて「適確なる文獻傳はらず、この仙臺保田光則の書せし和文體のものは、松島瑞巖寺の西南觀瀾亭の北方なる心月庵の遺跡にある碑石の、光則の撰文を鐫刻せしものより傳へたりと云ふ」と言つてゐるから、この話もまんざら根據のないものでもないだらう。

柿

八重さんが三貫匁の柿を背負つて、二里の路をやつて來た。稻揚げが終つたので、一日暇をもらつて遊びに來たのである。

もうそろ／＼炬燵をかける寒さなのに、襦袢に腰きりの短衣一枚のもつぺ姿なので、それで寒くないかと言ふと、重い柿を背負つて歩いて來たので、汗をかくほどだと言ふ。

この邊は實際柿が多い。殊に横手町の昔の城下町の方は、どの屋敷も柿の木ばかりである。さはして食ふ澁柿だが、甘くて、横手柿の名がある。八重さんのゐる村の方も柿が多い。このごろはその柿を、砂糖代りにつかつてゐるといふ。

ふと見ると、顔は艶々してゐるのに、なんと、八重さんの手は眞黒にがさ／＼荒れてゐる。乾柿の皮むきで、餘計に荒れたのだと、笑ひながら言つたが、農家に行つてからの苦勞のほどは、その手を見ただけで十分に察しられた。

八重さんは、町の勤人の奥さんで、去年の秋まですぐ近所に住んでゐた。それが、良人が出征したので、良人の實家に厄介になることになつた。

ところが、そこにゐるうちに、やうやく歩き出したばかりの可愛い男の子供を死なせてしまつた。出征するとき、後戻りして子供の顔をもう一度見に来たほど、子煩悩の良人は、それ以來ばつたり八重さんに傾りを呉れなくなつた。

しかし、それは必ずしも、八重さんの不行届ではなかつた。風邪で高熱になつたが、舅たちは、それぐらゐのことで醫者にかけることはないと言つて承知しなかつた。ただ一人の子供を失つた八重さんは、身の置きどころがない氣がしてただ涙に濡れてゐた。

春になると、姉の家から手傳に来て呉れと言つて來た。良人の實家は手不足でなかつた

し、良人が戦地で命を的に御奉公してゐるのに、ただ遊んでもゐられなかつたので、八重さんは姉の家へ行くことになつた。

姉の家は、屋敷が廣くて柿の木が三十本もあつた。それだけに、手作の田も澤山であつた。ところが、八重さんの姉は病身で百姓は出來なかつたので、働手は主人だけである。その主人も、實行組合、警防團、常會といそがしくて、田圃に下りる暇がない。今年あたりはみんな手間賃のいゝ方に行つて、野良働きに頼まれる者がない。

「もう百姓はやめるより外ないことや」

主人は溜息をもらした。ちやうど、長男が高等小學校を終つて、上の學校に行くことになつてゐた。主人の弟たちは、みんな中等學校はもちろん、その上の學校にも上つたので、息子にもどこの學校でも好きなところに入れると、つね／＼言つてゐたのである。

「みんな百姓しなくなつたら、大變だべ、俺あ、學校はやめたよ」
ところが、長男はさう言つて、すた／＼と田圃へ出て行つた。

八重さんは、この甥といつしよに、田植、草取、稻刈と、生れて初めての百姓仕事をせつせと勵んだ。手はひどく荒れたが、子供を失つた悲しみは次第に軽くなつて行つた。

種苗交換會

老農石川理紀之助によつて開設され、今年で六十年目になる秋田の種苗交換會は、いはば農産品評會であるが、土地では年に一度の農民祭と言はれてゐる。

いつも一週間の會期が、今年は三日に短縮され、場所も郡部から秋田市に変更されたと聞いて、私はこの由緒ある行事もいよ／＼影が薄くなつたやうな氣がしてゐたが、さて行つて見るとあべこべであつた。

家を出るときは、珍らしくからりと晴れて、眞白い鳥海山が見えてゐたが、一時間半汽車に揺られて、秋田驛に降り立つと、今にも降り出すばかりの空模様であつた。

濠沿ひの廣小路の一直線の長い舗装道路を、端から端まで埋めて、入波が滔々と流れて来る。昔とちがつて秋田市も賑やかになつたものだ、今昔の感でぼんやりそれを眺めながら歩いてゐた私は、やがてそれが種苗交換會の歸りの人々であることに気がついた。汽車で歸る郡部の人たちなのである。途中、圖書館に立ち寄つて、事務室で話してゐるうちに、冷たい霰がびしょ／＼と窓をたゞきはじめた。

小降りになつた合間を見て、私は縣廳の前を眞直に行つた先の新國道にある小學校の會場に行つた。

驚いたのは、その會場の光景であつた。隅から隅まで、冬支度の着ぶくれた人々が溢れ、犇めき合つてゐるではないか。私は二十年前に、二年つゞけて種苗交換會を見てゐるが、その記憶を辿つても、こんな夥しい觀衆は浮んで來なかつた。

立ちどまつてゆつくり見てゐる暇などはない。私はたゞ人に押されて、陳列品にいそがしく眼を動かして行つたが、どの室も群衆でぎつしりで身動き出來なかつた。

「暗渠排水」の室は、殊に混み合つてゐた。室の中央にある暗渠埋設の模型を八方から人々がのぞきこんで見てゐる。青年學校服の二人の青年が、土管代用の竹管に手を觸れて、しきりに何か云ひ合つてゐる。

「杉だば腐りやすいもんでなあ、松だばいいども」

頬被りをした親爺さんが、箱敷暗渠の水閘を持ち上げて、連れの男に言つてゐる。

續々と詰めかけて來る人々は、殆んど異口同音に叫んだ。

「暗渠だよ」

女たちの口からも、その聲は聞かれた。そして、すべての眼は、増産に必須な暗渠の意義を説き、その施設と効果を解説した陳列品に、食ひつくやうに注がれてゐた。

ちやうど、土地改良工事が、青年團や學生の應援のもとに、いつせいに村々に始まつてゐるといふ折も折であつたが、私はそこに米穀増産に對する一般の關心の強まりを見ないわけにはいかなかつた。

土砂降りの霽の中を私はぐしよ濡れになつて歸つたが、それほど冷いとも感じなかつた。

「湯澤のときも、大曲のときも、いつも雨であつたをな」

交換會のための臨時列車のなかで、さういふ聲が耳についた。思へば、稻揚げから雪が降り出すまでの間の、霽と泥濘とに、いつの年も切つても切れず結びついてゐる種苗交換會なのであつた。

エヅメ

秋田縣横手町に疎開して半年、田舎暮しもやうやく板について來たやうな氣がしてゐる。田舎には田舎の生活がある、その土地に入つたら、何よりもその土地の氣候と風土にしたがつた生活を知ることが必要である。それでないと、都會からの移住者は、餘計に流離の辛さを舐めなければならぬ。

吹雪の最中のころの一月二十九日に、三男が生れたが、その二十一日目の床上げになつて、家内が赤ん坊の頭を剃るといひ出した、チンケコといつてぼんのかぼの毛をちよつぴり残して、あとはつる／＼に剃るのがこの地方の習慣なのである。歩くやうになつても剃

る、チンケコを残すのは、子供が轉びかけたとき、神様がうしろからひつばつて呉れるのだといふ。しかし、自分は反対した。こんな寒い最中に風邪をひかせては大變だと思つたからである。

もう百日近くになるが、子供は今でもエヅメ（嬰詰）に入つてゐる。藁で編んだ大きな火鉢よりも更に一廻り大きいもので、子供は頭だけ出してすつかり布團につつんで、そのなかに入れて置くのである。いそがしい家では、手足まとひになるといふので、歩くやうになつてもエヅメに入れて置く。

「ほら、お母、飯こぼれた」

などと、子供はエヅメのなかから母親に注意したりする。

このエヅメは窮屈なので、家の子供はよく泣く、聞いてみるとこの家の子供もいやがるといふ。そんな子供のいやがるものが、何故今日も行はれてゐるだらう。そこまで考へてみるとこれはやはり一つの防寒法のやうである。吹雪のすさむ寒中には、これにまさる

方法がない。もうそろ／＼下に寝せるやうにしたらいいと家内に言つてゐるが、まだ山に雪があつて風が寒いので、子供はエヅメに入れたままである。迷信的な習慣は拒まなければならぬが、田舎には田舎の風土についての味ふべき生活があるのである。

この冬は失敗したが、今年は漬物を用意しようと思つてゐる。大根を餘程漬けたつもりであつたが、こんなばかりでどうすると、近所の人に笑はれた。はたして、大根漬は大寒も来ないうちに無くなつてしまつた。春が近づくにしたがつて、野菜難は甚だしくなつて来たが、ほかの家ではそれほど、あはててもゐない、これは矢張り漬物があるからであるらしい。

春は蕨、うど、蕨などの山菜、秋は茄子や大根などを、幾つもの甕や桶に鹽藏して、野菜や魚の缺乏する冬から春にそなへる。昔から行はれて来た雪國の民の深慮遠謀は、おのづから戦時の缺乏生活に役立つてゐるのである。

ついこの間のこと、町内の常會で私の前に坐つてゐる人が、物價の高いことに話が及ん

だとき急に、こんなことを言ひ出した。私たちの班長で、私の家のすぢ向ひの入である。

「東京から疎開して来る連中がなんぼでも金を出して買ふから、どん／＼物が高くなるんだよ」

言つてしまつてから、私の存在に気がついて、その人は顔を紅くして辯解した。

しかし、この種の行爲がしば／＼あつて、疎開者に對する土着者の反感を高めてゐることも事實なのである。この間も東京のある大金持が町に乗りこんで来て、金にあかせてあちこちの家を買はうとした。私の今住んでゐる家にも白羽の矢が立つた。幸に家主が動かなかつたので、私は追ひ出されずに済んだが、大金持はつひにある家を買ひ取ることに成功し、そこに住んでゐる人に追ひ出しをかけて、目下物議をかもししてゐる。

こんなのは論外だが、土着の人々の生活の秩序をみださないやうに、疎開者は些細なこともでも氣をつけなければならぬ。それには先づ田舎の生活を一日も早く知る心掛を用意することである。

齋藤宇一郎

米穀増産の鍵である土地改良を、最初に秋田縣に持ちこんだのは、農民の父として石川理紀之助翁と並び稱されてゐる齋藤宇一郎であつた。乾田馬耕、堆肥の改良、東立廢止、改良苗代、耕地整理、暗渠排水と、今日の米産地秋田の基礎となつたすべての農事上の改良は、宇一郎の生涯を捧げた誠心誠意の指導に、その源を發してゐるものである。

今でこそ秋田縣は、陸羽百三十二號によつてその名を知られ、百萬石の米を縣外に移出する全國有數の米の産地として食糧國內自給の名譽ある任務の一翼を擔つてゐるが、それは近年に屬することであつて、明治四十年ごろまでは極めて遅れた耕作法が一般に行はれ

てゐた。

俗に秋田の腐れ米と、深川あたりでも言はれて、品質が悪いばかりか、収量の點においても、明治の中頃までは秋田百萬石と言つて、現在の收穫の半分ほどしか達しないやうな有様であつた。それを齋藤宇一郎が明治の中頃からあらゆる點で熱心に指導したのが原動力となつて、その後著々として改良が行はれるやうになり、つひに米産地として全國有数の地位を勝ち得るに至つたのである。

今試みに秋田縣の由利郡に足を運んでみると、耕地整理が隅々まで行きわたり、いたるところの農家に立派な堆肥舎があるのを見るだらう。金肥に代る自給肥料の増産などは、ここでは今更改めて説き立てる必要がない。なかでも小出村は、反當り七百貫を目差して、全國一の堆肥村とまで言はれてゐるが、これもひとへに宇一郎の指導によるものであつた。暗渠排水なども、宇一郎はすでに大正の初めに、自分の町の平澤町に持ちこんでゐる。即ち、大正三年に、富田式暗渠排水法の創始者、佐賀縣人富田甚平を招いて、講習會を開

いた。その結果はかねて宇一郎の指導にしたがつて早くから土地改良を行つてゐた須藤太市が、先づ同町字樋ノ口の二段歩の田畑に箱敷法の暗渠排水を行ひ、それを皮切りとして、漸次あちこちに普及するやうになつた。

しかし、さうなるまでには、兎角舊慣を改めたがらない農民の中にあつて、宇一郎は幾多の反對と冷笑嘲罵を受けなければならなかつた。

「齋藤の旦那なんか、何が百姓の事がわかる」

耳にたこがよるほど、さういふ蔭口を聞いた。また時には、

「あの野郎、ぶつ殺して呉る」

などといふ凄文句さへ耳にした。しかし宇一郎は動じなかつた。

東京農林學校を卒業後、日清戰爭に従軍、明治學院の教授から農商務省の林務官として奉職してゐた齋藤宇一郎が父茂介の訃に當つて、故郷秋田縣由利郡平澤町の家立ち歸へり家督を繼いだのは、明治三十二年であつた。

出でて官吏として公に奉すべきか、それとも、止つて家郷の爲に盡すべきか、突然の父の死に遇つて宇一郎はしばらくは進退に迷つてゐた。

しかし、靜かに自分の身邊を顧みるに、當時の農村の有様は、黙視するに忍びない状態であつた。日清戦争後、日尙淺く、物價は騰貴し、かてて加へて凶作に見舞はれ、暮し向きに困窮して棄鉢になつた百姓は、小作米を納めず、地方廳もまたこれに對して何等の施設を施すところがなく、農村はますます荒廢しようとしてゐた。これはどうしても棄てて置かれない状態であつた。宇一郎は斷然止つて農事改良に手を染める決心をした。

そこへ、亡父の茂介等二、三の地主たちによつて庄内から馬耕教師として招かれて來てゐた齋藤源之助が、ひよつこりやつて來た。

「大變御厄介になりましたがお暇させて頂きます」

見ればなるほど、源之助はすつかり身支度してゐた。

「え、庄内へ歸るんですか」

宇一郎はびつくりして顔色を變へながら言つた。

「はい、何も御役に立たず、たゞ御厄介になつたばかりで、申譯ありませんが——ちやうど三年間の期限が來ましたから」

さう言へば、三年間の約束であることを、いつか父から聞いたことがあつた。

「いやそんなことはありません、二年や三年で農民たちがすつかり眼をさますはずはないのですから、一人でも二人でも馬耕を始めるやうになつたことは大した收穫ですよ」

宇一郎はしばらく口をつぐんでゐたが、やがて膝を進めて言葉をついだ。

「どうでせう、もうしばらく止つて助けて頂けないでせうか」

「さあ——何しろ、もう三年もやりましたから」

さう言つたきり、黒々と陽焼けした顔を俯向けて、源之助は黙りこんでしまつた。

「約束の期限が來たのですから、強ひてお引留めするわけにはいきませんが、若しも出來たら是非お願ひしたいのです、私も乾田馬耕は飽くまでやつてみたいと思ひますので」

宇一郎の柔和な細い眼が、急にきら／＼と輝き出してゐた。

農林學校に學んだだけではなく、近年は農商務省の林務官として九州、長野、新潟などの農山村をしば／＼視察して、宇一郎はこれらの地方の農業の状態を知つてゐた。しかも九州に於ける福岡の進んだ農法には強く動かされてゐた。乾田馬耕が普及して反當り三石も收穫がある。加ふるに、裏作の麥がまた三石も穫れる。それに反していまだに田打ちに馬をつかふことを知らず、頭から泥をかぶつて田を打つて、僅か一石そこ／＼の收穫しかないこの邊の百姓がいかにもみじめなものに想はれて仕様がなかつた。何を措いても先づ、この泥田を乾田にし、馬耕を普及しなければならぬ。さうすれば百姓は腰まで冷い泥田に入る難儀をしなくても済むし、米も忽ち、反當り二斗も三斗も增收することが出来る。

「しかし、駄目でせう」

源之助は、あつさり突つ放すやうに言つた。

「と、言ふと——」

息をつめて、宇一郎は返事を待つた。

「なんぼやつたつて、獨り相撲で誰も相手にして呉れないですものな」

宇一郎の父の茂介が、乾田馬耕の普及を志して、二三の地主たちとかたらつて、源之助を教師として招聘したのは、三年前であつた。海岸續きの庄内地方では早くから乾田馬耕が行はれてゐた。酒田の本間家が、横井時敬博士を介して、明治二十四年に、福岡の老農伊佐治八郎を招いて、乾田馬耕を傳授したのが初めであつたが、源之助はその治八郎の高弟であつた。茂介の夫人はその庄内の出で縁故があつたところから、茂介は本間家の農場から源之助を引き抜いて來たのであつた。源之助は三年の間、熱心に乾田馬耕を指導した。しかし、誰も本氣になつて聞くものはなかつた。多くの者は、馬で田が起せるわけはないと、てんで相手にしなかつた。田を乾してしまつては、米が餘計穫れない、味がわるくなると言つて、振り向かなかつた。黙つて聞いたり見たりしてゐる者も、いよ／＼となると實行しなかつた。三年の間に、わづか二三人の同志を得ただけであつた。

「やつぱりこれは、教へる人間によるものだすべもの、俺みたいな人間の言ふことは、誰もきかないの、當り前だすべ」

謙讓な性質の源之助は、自ら卑下して、溜息をもらした。さんざん罵倒され、冷笑されながら、怒つた顔一つ見せず、三年の月日を黙々として指導して來た源之助であつた。

「いや、そんな馬鹿なことはない、もう少しです。必ず効果が出て來ますよ、まあ見棄てないで下さい」

そんな熱心な源之助の指導に對して、何等酬るところのなかつた村人に代つて、詫びるやうにさう言つてから、宇一郎は急に思ひ出したやうに言葉をつづけた。

「實は、私に一つの考へがあるんですよ、今までの巡廻指導をやめて、試作田をつくつて、收穫を實地に見せてやつたらどうかと思ふのですがね」

といふのは、父茂介たちの組織してゐた地主會は、結束が亂れてばら／＼になり、小作たちに對して何等の指導力をもつてゐなかつた。そこで宇一郎は、單獨で指導にあたる決心をしたのである。それに茂介たちの採つてゐた巡廻指導といふ方法は、効果の少いものであつた。

「やつぱりね、乾田の利益を口でいくら説いたところで、實際にやつてみる氣にならぬのは、むしろ當然ですよ。收穫の多寡は死活の問題なんだから——それよりも、試作田をつくつて、實際にこれだけの收穫があるといふことを見せてやるのですね」

父を失つた悲しみに沈んでゐた宇一郎は、久しぶりに多辯になつた。

「なるほど、それはさうですな、それなら、私としても、いやな顔をされながら馬耕をすすめて歩かなくても濟むし、氣が樂ですよ」

人々に冷眼視されて、追ひ立てられるやうに國に歸らうとしてゐた源之助の顔には、やうやく明るみが差して來た。

「やつて呉れますか」

宇一郎は躍り上らんばかりに喜んだ。

「はい、私としても、本當はこのままおめく／＼引き下りたくはなかつたのです、あなたがさういふお心なら、私も出来るだけやらせて貰ひます」

源之助の眼は微かに濡れてゐた。

東北地方の春は遅い。やうやく雪が消えて、四月も半ばを過ぎ、彼岸櫻がちらほら咲き始めるころになると、源之助はいち早く栗毛の馬を追つて、一町五反歩の試作田をつくり始めた。場所は村人の往來のもつとも頻繁な路ばたの田を選んだ。やがて、青々と育つ稲の出来榮を、出来るだけ多くの村人の眼に入れる必要があつたからである。「齋藤宇一郎試作田」の立札も新しい田圃には、絶えず源之助のせつせと働く姿が見出され、三十間置きの排水溝も見事に出来上つて行つた。

「おい、ミネ——お前も來なさい」

ある朝、宇一郎は自分で厩から馬をひき出しながら叫んだ。

「まあ、あなたが馬耕をなさるんですか。源之助にまかせて置きなさればいいのに」

「いや、いいから黙つてついて來なさい」

「そんなことを仰言つて、あなたに出来るもんですか。とても難儀な仕事だつて言ふぢやありませんか」

「出来ないから源之助に習はうといふんだよ。自分で出来ないことを、人にすすめるわけにはいかないからな、俺はやつてみるんだ」

「旦那、容易でないですよ」

源之助は笑ひながら犁を運んで來た。

「まあいい、俺にだつて出来ないことはないよ、さあ、みんな行かう、豊一も寛二も來い、見物がゐないと張合がないからな」

野良著姿の宇一郎は、子供たちにさう呼びかけて、馬をひいてさつさと歩き出した。すると、やうやく三つの春を迎へたばかりの三男の憲三も、ちよこちよこかけ出して來た。やがて、琴の浦といふ砂地へ行つて練習を始めたが、馴れない宇一郎は半日の練習で、

すつかりへとくになつてしまつた。當時、押し犁と抱へ犁の二つがあつたが、宇一郎は横井時敬博士の推奨する抱へ犁の方の採用者であつた。押し犁が一定の深さしか起せないのに對して、これは深淺自在で、深耕に適してゐるからであつた。しかしこの抱へ犁は、少し押し過ぎると、深く突きささつて動きが取れなくなるし、浮かすと、上滑りするし、作業は遙かに骨が折れた。

宇一郎が馬耕を習つてゐるといふことは、忽ち近郷近在の評判になり、馬耕反對の聲は一層やかましくなつた。そのときに、馬耕の砂が飛んで、俺の田が荒れた、と苦情さへ言ふ者があつた。しかし宇一郎は、その技術をすつかり習得するまでやめなかつた。

「また琴ヶ浦へお出掛けになるんですか」

「いや、今日は兩前寺へ行くよ」

宇一郎は琴ヶ浦の連中の苦情の聲を聞くと、すぐ場所を變へることにした。

「その方がようございますよ、あんなどころへ行つて、若しもの事があつてはいけなから」

ミネは良人の身邊に思ひがけぬ危害が及ぶことを、何よりも心配してゐた。

「いや、さういふわけぢやない、人に迷惑をかけたくないからだよ」

自分ではそんな覚えはなかつたが、若しも馬耕の砂が飛んで、他人の田に入るやうなことがあつてはいけないと、場所を變へたのであつた。田圃から離れてゐる兩前寺ならそんな心配はなかつた。

稔りの秋が來た。齋藤宇一郎試作田の稻は、ほかのどの田よりも、重々しく穂を垂れた。乾田馬耕が、從來の濕田の農法に優つてゐることが見事に證明された。

その年、平澤町の農會長に就任した宇一郎は、秋季總會に於いて、乾田馬耕の普及、灌漑溝の完備、稻架の奨勵、新苗代の普及、堆肥の改良、品評會の開設、を決議するとともに、それを著々と實行に移す努力をして行つた。

一方、「乾田馬耕試作田」の試作報告を、毎年刊行して、諸方に頒ち、秋には品評會を

開催して、その優良な成績を村の人たちに見せた。

しかし、乾田馬耕は容易には普及しなかつた。昔からの泥田を乾かしてしまへば、米が穫れなくなると言つて、習慣から抜けられない者が大部分であつたが、中には反對に、乾田にして増収すれば、小作料を上げられると考へてゐる者もあつた。反對と妨害は依然たるものであつた。

宇一郎は敢然、敵地に斬り込む決心で、その反對の聲の最も高い、隣村の院内村馬場字谷地中に、新に試作田を、押し進めた。それはあちこちに散らばつてゐる田を交換分合して集團地とした三町五反歩の大がかりの試作田であつた。

宇一郎は、毎日のやうにそこに出かけて、源之助を指導して作付を進めた。

「あつ、先生、——苗代が荒されてゐます」

めつきり暖かくなつたある日の朝、源之助はただならぬ聲をあげた。

見れば、苗代にはいちめん石が投げこまれ、試作田の立札は堰の中に抜き棄てられてゐた。

「畜生、見つけたら、ただでは置かれぬ」

怒り顔を曾て見せたことのない源之助も、このときばかりは、齒ぎしりして口惜しがつた。

「なあに、大したことはないよ、何事も辛抱だ、今にわかるときが来る」

しかし、宇一郎は顔色一つ動かさず、おだやかにさう言ふだけだつた。肝心の宇一郎がそんな調子なので、怒つてゐた源之助も拍子抜けがして、また黙々として、作業をつづけた。

投げ入れられた石を一つ一つ拾つて、苗代をなほして行つた。試作田の苗代は、どこの苗代よりも苗起きがよく、丈夫にすく／＼と色づいて行つた。

いよ／＼田植が間近くなつたある日、源之助が、しよんぼりとした姿でやつてきた。

「先生困つたことになりました」

「え、なんです」

また苗代の苗を抜き取られでもしたのかと思つて、宇一郎は一寸顔色をあらためた。

「誰もサツキに来て呉れる者がないのです」

サツキといふのは、田植のことである。一時を争ふ田植は、家の者だけでは出来ない。多勢の手傳がなければ、三町五反歩といふ田はどうにもならないのである。

「いつたい、どういふわけなのかね」

「堅田は土が固くて、手が痛むから御免だと言ふのです」

やうやく源之助は途方に暮れた顔を上げた。乾田のことをこの邊では堅田と言つてゐた。「なに手が痛むつて」

なるほど幾分そんなこともあるかも知れない。しかし、乾田だとして、やはり田植には水を入れて代掻きをする以上、草取りのときのやうに、そんなに手が痛むはずはなかつた。

抱へ犁に對する反對では、宇一郎も考へさせられてゐた。この方が深耕出来るといふ點で、飽くまで所信を曲げないつもりではゐたが、實際自分で経験してみても、押し犁にくらべて作業に骨が折れることがしみるゝわかつた。しかし、それとこれとは同時に論ずべきものではなかつた。難癖をつけようと思へば、どこにでもつけられるものだ、ただあきらめるよりほかになかつた。

「馬耕したあと、よくよく鍬で碎いたし、そんなに土がごろ／＼してゐるわけではないのだども」

おとなしい質の源之助は、それが自分の作業上の手落ちでもあるかのやうに、憂ひ顔で言葉をにつづけた。

「谷地中の者は、誰も出て呉れさうもないのです」

田植は一日遅れても大變であつた。

「よし／＼、そんなら谷地中の者には頼まなくてもいい、ほかから頼むことにする、私も歩いてみよう」

宇一郎は自分で田植女を頼み歩くべく立ち上つた。そして八方に奔走した結果は、田植は無事に済んだ。やがて二番草、三番草と草取りも終つて、花が咲き、お盆が過ぎると、稔りの秋となつた。

三町五反歩の廣々とした試作田は、見事に稔つた。どこよりも重々しい稔りの穂波であつた。濕田にくらべて、反當り三斗も四斗も餘計に出來たことは、鎌を入れてみるまでもなかつた。

田圃を通る度に、人々は眼をみはつた。冷たい水に入らずに乾いた田で、こんなに米が穫れると思ふと、それまで事毎に乾田に反對してゐた人々は、あべこべに羨しくさへなつた。俺も來年はやつてみようと思ふやうになつた。

翌る年には、近郷近在に乾田馬耕がぐんとふえた。そのまた翌る年には、平澤の田の八割までは乾田になつた。宇一郎が試作田をはじめから四年目の明治三十六年であつた。

あと一息で、すつかり乾田になつてしまふのであつたが、その残りの一割が問題であつた。といふのは、ここに佐助といふ頑固爺さんが大手をひろげてがんばつてゐるからであつた。

「どうだらうなあ、爺さんお前さんさへその氣になつて呉れたら、みんな仲間入りして呉れるんだがなあ、一つ今年はやつてみてくれないかな」

宇一郎は下手に出て、もの柔らかに説いた。

「冗談じゃありませんよ旦那、田を乾してしまつたら、養分がなくなつてしまつて、代苦心して來た先祖に申譯ありませんよ」

佐助はてんで問題にしなかつた。

「水を排いたからつて、田の養分がなくなるわけはないよ。却つて陽に當てた方が、土壌がよくなるんだよ、その結果は試作田の成績を見たらわかるぢやないか」

「なあに、あれは旦那が金にあかしてやるからで、むしろ水呑百姓には、逆もそんな眞似は出來ませんよ」

手の平に吸殻をころ／＼ころがして、一ぶくつけながら言ふ佐助爺さんの胸には、あれは旦那の道楽仕事だといふ僻みが、とぐろを巻いてゐた。それを見てとり宇一郎は、一轉して別の方から話をもつて行つた。

「だつてねえ、腰まで冷い水に入つて、疝氣を病まなくても濟むだけでも、大した得になるぢやないか」

實際、昔の濕田に、腰までつかつて、苗代をつくり、田打ちをする、その難儀はお話にならないものであつた。

「そりや、水に入らなくて濟むでせう、んだども、春先になつてばん／＼と乾いた田圃は、固くて固くて、俺みたいな年寄には逆も起せるものぢやない、旦那は田打は御存知ないかも知れないども」

佐助はちらと皮肉を眼を伏せて、勝誇るやうに、煙管をぼんぼんと爐縁にたたきつけた。「なあに、いくら固くつたつて、馬をつかへば何でもないさ、長著物でも出来るよ」

佐助はてんで馬耕を考へてゐないのであつた。馬をつかつて田を打つなどといふことはお天日様が西から上ることと同様にあり得べからざることだとしてゐるのであつた。

「田打に馬などつかへますかよ、馬はてんで言ふことを聞きませんよ」

實際、その頃の馬は荒かつた。なか／＼言ふことをきかなかつた。しかし、この頃では村の人々もだいぶ使ひ馴れて來てゐた。

「そりや、何だつて、初めは苦勞があるよ、しかし、馴れ／＼ば乾田馬耕の方が樂だし、一反歩から二斗も三斗も、餘計とれるからね、初めは難儀でも、そこを辛抱して、やつてみてくれよ」

「いや、なんと言つたつて、馬などつかへないな」

ぶいとそつばを向いたぎり、佐助はもう相手にならなかつた。また失敗した。宇一郎は苦笑ひしながら戻つて來た。

「どうでした、爺さん、兜をぬぎましたか」

待ちかまへてゐた源之助がきいた。

「いや、なか／＼一筋縄ではいかないよ、なあに、そのうち説き伏せてみせるがね」
宇一郎は怒つた顔も見せなかつた。そしてその後も暇があると爺さんの家に出かけて行つて説得につとめた。

しまひに佐助爺さんは、宇一郎の姿をみると、こそ／＼とどこかへ逃げかくれるやうになつた。

ある日も、宇一郎は爺さんに會ひに行つたが、いくらさがしてもみつからなかつた。しまひに海岸の方まで行つた。

と、濱近くの掘立小屋に、ちよこ／＼と走りこんで行く老人がある。見れば佐助爺さんであつた。

宇一郎は追ひかけて行つて、例によつて乾田馬耕の利を説きはじめた。

「なんぼ言つたつて、儂は田を乾しはしませんよ、人の田を、かうしろのああしろのと、

餘計な世話焼かなくてもいいすべな」

終ひに、佐助爺さんは、ぶすりと言ひ切つた。

「また／＼失敗した、今度は一層手きびしくやられて來たよ、はつはつは」
謹嚴な宇一郎は、珍しく聲をたてて笑つた。

「あの頑固爺、そんなに言つても承知しないんですか」
それを聞いた町の有力者の一人は言つた。

「——あんな奴に、下手に出ることはありませんよ、いくら言つても、きかないなら、上から抑へつけてやらせるんですな、けしからん奴だ」

「いや、それは困ります。私は無理に押しつけたくはないのです、物事は、ほんとに自分からやる氣にならなければ、うまく行かないものだから」

宇一郎の家は、仁賀保藩の家老格の家柄であつた。宇一郎また數年前から衆議院議員となり、かつ農會長の地位にあるだけでなく、徳望を以てきこえてゐた。その地位と勢力を